明治三十九年七月二十五日發行
(明治二十年十一月本會創立)

婦人衞生雜誌

第二百號

第三種郵便物認可明治廿六年四月四日
毎月一回二十五日發行
内務省許可明治二十一年二月二十八日

私立大日本婦人衞生會

婦人衛生雜誌

第貮百號目次

名家演壇

大家談叢

質疑欄

季節料理法

寄書

雜錄

大日本婦人衛生會記事

私立大日本婦人衛生會

設立趣意書

凡そ人として此世にありては徒に生けるのみをもて足れりとするにはあらずかならすや相識を脩きたる本分を盡くし幸福快樂のうちに一生を送らんとは皆ともに希はざるはあらざれども其身健康にあらざれば此生活を得んこといゝ易からずこれ衛生の道の一日も忽にすべからざる所以なりとす

抑も衛生の法は一にして足らずといへども衣食住の改良育兒及看病法準備の如き [illegible]

明治二十年十一月

首唱者總代

私立大日本婦人衛生會規則摘要

（明治廿二年十二月改正）

第一條　目的　本會の目的は汎く婦女子をして衛生の [illegible]

[illegible]

東京市牛込區上宮比町八番地

私立大日本婦人衛生會

●役員姓名

總裁 東伏見宮依仁親王妃 周子殿下
會長 侯爵夫人 鍋島榮子
副會長 濱尾作子

（いろは順）

幹事 鳩山春子
仝 羽田三緒子
仝 岡田德子
仝 高木かう子
仝 山本多穂子
仝 松平芳子
仝 三浦教子
評議員 石川貞子
仝 岩下ゆか子
仝 濱田捨子
仝 長谷川仲子
仝 仁禮壽賀子
仝 西升子
仝 穂積歌子
仝 土肥多越子
仝 緒方悦子
仝 岡山とし子
仝 小川孝子
仝 男爵夫人 加藤鈴子
仝 片山龜子
仝 吉武輝枝子
仝 戸波貞子
仝 高橋孝子
仝 田村きよ子
仝 男爵夫人 南部限子
仝 中濱芳子
仝 子爵夫人 松井正子
仝 岸澄子
仝 三宅藤子
仝 宮本樂子
仝 宮下咲子

●支會 千葉、新潟、山形、宇都宮、茨城、高崎、米澤

本會特別贊成員

（●は本會の爲め講演又は執筆せられし諸氏）

醫學博士 ●入澤達吉君
理學博士 ●飯島魁君
ドクトル ●伊澤信平君
●色川圀士君
醫學博士 ●伊東祐彥君
ドクトル ●飯盛挺造君
醫學博士 ●伊藤隼三君
理學博士 ●石川千代松君
赤十字社內科醫長 ●岩井禎造君
醫學士 ●石原久君
醫學士 磐瀬雄一君
醫學士 ●石原喜久太郎君
貴族院議員 濱尾新君
醫學博士 ●濱田玄達君
法學博士 ●鳩山和夫君
東京 萩原翻四郎君
醫學博士 ●芳賀榮二郎君
●長谷川泰君
新潟 ●長谷川一詮君
小兒科 小原料之君
醫學博士 ●岡田榮吉君
醫學博士 ●林春雄君
醫學博士 ●佐藤達次郎君
醫學博士 ●緒方正規君
步兵中佐 ●堀内文次郎君
醫學博士 ●土肥慶蔵君
醫學博士 ●岡山和一郎君

醫學博士 ●大澤謙二君
醫學士 大西秀治君
醫學博士 ●大澤岳太郎君
一等藥劑官 ●恩田重信君
醫學士 若杉喜三郎君
男爵 ●加藤弘之君
ドクトル ●加藤照麿君
醫學士 ●賀古鶴所君
醫學博士 ●河本重次郎君
醫學博士 ●片山國嘉君
醫學士 ●川上雅城君
醫學士 ●樫田龜一郎君
醫學博士 ●金杉英五郎君
醫學士 ●笠原光興君
醫學士 ●唐澤光德君
醫學博士 ●高橋順太郎君
ドクトル ●高山紀齋君
醫學博士 ●高木兼寛君
法學博士 高木豐三君
醫學博士 ●田代義德君
新潟 ●田代亮助君
男爵 高崎正風君
醫學士 ●竹中成憲君
醫學士 ●高田耕安君
新潟病院長 ●高橋辰五郎君
藥學博士 ●丹波敬三君
醫學士 高橋貞碩君
藥學博士 ●田原良純君
醫學士 ●田村光顯君
醫學士 ●久保猪之吉君
醫學士 ●米山彥郎君
二等軍醫正 ●星野蔡光君
醫學士 ●宮本俶君
三等軍醫正 ●横井忠閣君
大日本教育會長 辻新次君
理學博士 ●坪井正五郎君
醫學博士 ●長與稱吉君
男爵 南部聰男君
藥學博士 ●長井長義君
醫學博士 ●中濱東一郎君

醫學士 ●黒田玄通君
醫學士 ●栗木府勝君
海軍中佐 ●小笠原長生君
醫學士 村松鐵三君
醫學博士 ●隈川宗雄君
醫學博士 ●栗本東明君
醫學士 ●山田鐵三君
醫學士 ●山田弘倫君
醫學士 ●山根正次君
岡山 山川春二君
衛生試驗所技手 ●丸山長四郎君
ドクトル ●松山陽太郎君
ドクトル ●小此木信六郎君
盲唖學校長 ●小西信八君
廣島 小泉貫君
醫學士 ●古川榮君
東京 布施正顯君
臺灣民政局長 ●後藤新平君
帝國大學教授 ●エ、ベルツ君
醫學士 ●甲野棐君
文部書記官 ●寺田勇吉君
醫學士 ●寺田鬱作君
醫學士 ●寺田織尾君
子爵 秋元興朝君
前軍醫總監 ●足立寛君
ドクトル ●新井古芳君
ドクトル ●富士川游君
高崎醫會 土谷全次君
產科婦人科長 ●水原漸君
ドクトル ●久保田誠麿君
醫學博士 ●佐々木政吉君
醫學士 ●淺田次君
醫學博士 ●朝倉文三君
ドクトル ●朝山彥六君
高崎 秋田聰太郎君
醫學博士 ●佐藤三吉君
醫學士 ●櫻井郁二郎君
醫學士 ●佐藤恒久君
ドクトル 佐伯理一郎君
醫學博士 ●鈴木順次郎君

醫學博士 ●榊保三郎君
醫學士 ●櫻井恒次郎君
醫學博士 ●桐淵鏡次君
醫學士 ●北村精造君
醫學博士 ●北島多一君
ドクトル ●北川乙二郎君
醫學博士 ●木下正中君
醫學士 ●北島小太郎君
醫學博士 ●北里柴三郎君
醫學博士 ●三浦守治君
醫學博士 ●三浦謹之助君
小兒科專門 ●宮本仲君
理學博士 ●箕作佳吉君
醫學博士 ●三島通良君
醫學博士 ●三宅秀君
醫學博士 ●三輪信太郎君
伯爵 土方久元君
醫學士 ●島村俊一君
醫學博士 ●弘田長君
ドクトル ●日高昂君
ドクトル ●須田卓麿君
醫學士 ●澄川德君
醫學博士 ●木村德衛君
醫學博士 ●森林太郎君
醫學士 ●征川三男三君
醫學士 ●波多野惇君
醫學博士 ●吳秀三君
ミス ●ヒユース
ミセス ●コーツ
ドクトル ●菊池所一君
醫學士 ●橋本左武郎君
醫學士 ●鳥居春洋君
ドクトル ●十川川三郎君
ドクトル ●佐藤[illegible]雄君
ドクトル ●內山信光君



私立大日本婦人衛生會新潟支會
副會長 關八重子



私立大日本婦人衛生會新潟支會
幹事 高橋たゞ子

婦人衛生雜誌第貳百號（明治三十九年七月二十五日發行）

名家演壇

疾病の話（前回の續）（於本會）

ドクトル　富士川游君　演説

相替らず病氣のお話を致します、それで前回迄にお話を致しました要點を摘んで申しますと、人間の身體は細胞から出來て居ります、身體には種々の臟器がありますけれども、其根本たるものは細胞であつて、その細胞が澤山集つて、而して人間の身體が出來て居る、此細胞が一定の働きをして人間の生活と云ふことが出來る、所が外に何か刺戟する物があつて之が細胞を突ッ付くと細胞の形が變りて常の通の作用をせぬやうになり、生活機能に一定の變化が現はれる、これを病氣と云ふのである、斯う云ふことを三回迄續けてお話をしました、

病氣には御存知の如く色々あります、例へば肺病、胃病、或は呼吸器病、傳染する病氣、例へば膓窒扶斯とか或は麻疹とかて、病氣と云ふものは色々の形をして居り、又色々の性質を持つて居ります、其病氣の種類とか或は病氣がどんなものであるとか云ふことを一々に就て研究するのは醫學者であつて、それは醫學の知識がなければ到底分りませぬけれども、病氣全體を通じて、病氣はどう云ふものである、其病氣はどう云ふ風に顯はれるかと云ふことだけ分れば醫者でない方々の心得には十分なのでありますす。

繰返していふやうでありますが、人間の身體は色々の形に分れて居りますけれども其根本と云ふものは細胞であります、眼とか鼻とか手とか足とか器官は種々雜多であるが、これは皆細胞から出來て居る、其細胞が何十萬何億萬集つて人體が出來て居るのであります、それて外から刺戟が來て細胞を侵すと其

細胞が形を變へて病氣と云ふものになる、それてありますから病氣と云ふものは健康と反對ものてはない、健康も病氣も同じ細胞の作用てある、健康と云ふものと病氣と云ふものは其顯はれ方が違うのてありましてつまり細胞の働きが唯だ變るに過ぎないのてあります、是て大體病氣と云ふものはどう云ふものてあると云ふことがお分りになつたらうと思ひます。

それて外界の刺戟には水もあれば、空氣もある、又微菌などもある、つまり刺戟物は色々ありまして細胞を刺戟することも種々てある、それて以て病氣に色々の形が出來る、胃の細胞を冐せば胃病になる、生殖器の細胞を冐せば生殖器病になる、細胞の刺戟の模樣に依て實に千態万狀てあります、それを調べるのは前にも申す通り醫學者てあつて醫學の知識がなければならない、しかし醫學をやりませぬ人ても病氣の事の大體を心得て、而してどうすれば刺戟物をこちらに來ないやうにするとが出來るかと云ふことが分れば、病氣と云ふものを豫防することは自然に出來るのてあります、それて病氣の大體はお分りになつたとして病氣と云ふものは、人間の身體の出來工合が大變に違つて居るために、同じ病氣てあつても其病氣の工合が非常に變る、それを概略申しますと、先づ子供の病氣と大人の病氣とがある（圖を示す）此は神經の病氣てありますが此處に筋が書いてあるのは年齡てありまして五歲迄は神經系の病氣て死ぬものが多い、それから十歲から二十歲迄少い而して七十五歲位になつて又多くなる、赤い筋が男、靑い筋が女てあります、それて此表を見れば神經系の病氣と云ふものは子供と老人とが餘計罹る、老人も女よりか男の方に多いといふこと分るのてあります、又子供の時に多い病氣は呼吸器病てあります、而して是が老人になると非常に多い、神經系の病氣と同じことに呼吸器の病氣は子供と老人の病氣てあります。（表を示す）

此呼吸器の病氣は色々ありますけれども其中て一番

世人が知つて居るのは肺病であります、此肺病も子供の時には數が多くて十歳から十五歳迄は少い、十五歳から老人になる迄非常に多い、是迄肺病と云ふものは年の若い時に多くあるので、子供の時と老人には少いと云ふたこともありますがそれは噓です、肺病と云ふのは此通り子供の時は無論多い、それから一時少くなつて年を取るに從つて又肺病で死ぬるのが多い、其外に哺乳兒の時には痙攣と云ふものがある、是は病氣でありませぬけれども色々の原因で痙攣を起して死ぬものが多い、それから下痢、それから呼吸器の病氣それから生活薄弱と云ふて身體が弱い、是れは子供の死ぬる原因の多きものである。

乳飲兒が一番餘計に死ぬる原因は、生活薄弱、下痢、痙攣、吸呼器の病、それが乳を飲むのを止めて暫く經つと病氣は減つて今度は傳染る病が多くなる、近頃流行致します猩紅熱、實扶垤里亞、それから腸窒扶斯、さう云ふ病氣は五歳から十歳迄に多く、十歳から十五歳位迄は肺結核、腸窒扶斯呼吸器の病、それから後は肺結核、癌腫と云ふ病氣が起つて死ぬ、中年の二十歳から三十歳迄の病氣は癌腫と肺結核、年を取ると心臟、呼吸器の病、それから水腫、斯う云ふ風に病氣はつまり子供の病氣と老人の病氣とそれから大人の病氣と斯うなつに分けることが出來る。

それから田舍の病氣と都會の病氣と違ふ、是は重に外界の事情が變る爲に變化するのでありますが、併し身體の工合も田舍の人と都會の人とは違ふ、其田舍と都會との病氣の違ふのは引くるめて言ふと、婦人では左程著しい變りがなくて、男の方に違ひがある、婦人の病氣は田舍でも都會でも違ひは著しくないが子供と老人は田舍と都會で大變違ふ、中年の人では田舍でも都會でも違ひはない。

それからもう一つ著しいのは貧乏人の病と金持の病、例へは英吉利あたりの痛風は金持の病氣、日本ては癌腫が豪傑の病たと云ふことであります、それはさて置き、貧民と金持の病氣には著しい差があり

ます、其著しい差は貧民の身體は金持の身體と違ふ、それに加ふるに外界の事情が變るために、そう違ふのであります、貧民の罹り易い病氣として認められるのは肺結核、虎列剌、窒扶斯、是は何處の國でも貧乏人の病氣として差支ない、此外の病氣は醫者の知識を要しまして調べるに骨が折れますが、傳染する病氣は調べがやさしい、そこで傳染する病氣と明かに二種ある、虎列剌、天然痘、窒扶斯は貧乏人に多い、實扶垤里亞、百日咳、猩紅熱、此病氣は金持に多い、重に英吉利の統計で御話を致しますが日本の統計も矢張是と同じであります、實扶垤里亞・百日咳、斯う云ふやうな子供が罹る病氣は學校病と稱して居る、これは富者の家族に多い、窒扶斯、虎列剌などは何處の調べでも貧民に多い、それから人間の身體は男と女との身體に相違がある、身體に相違がありますから從つて病氣も違はなければなりませぬ、さうするとつまり男の病氣と女の病氣がなくてはならぬ、即ち神經系の病氣は之は男の方に多い、呼吸器の病氣も男の方が多くて婦人が少い、小便に關係しました方の病氣も男に多い、生れてから四十五迄は男も女も同じやうでありますが、四十五を超へると男が數が多い、婦人の方では左程多くありませぬ、(此時表を示す)心臟病も是も確に男の病氣であります、一體に男と云ふものは病氣に罹り易くてさうして大變に死に易いものであります、生れる時は男が多く生れますが百から上を超へると男は尠ない。

生殖器病は是は男と女と非常に違ふ、生殖器と云ふのは子宮、卵巢などを言ふのであります、產褥熱なども此中に這入つて居ります、生れてから五歲迄は男の方も女の方も大抵同じであります、五歲から十歲になると、此靑い筋が(表を指す)婦人で、赤い筋が男でありますが、五歲迄は男も女も生殖器病で死ぬ數は同じであります、五歲から十歲迄の間には婦人の方も男の方も矢張同じであります、十五歲から男の方が多くなる、二十歲になつて數が多い、而し

て婦人の方てありますと十五歳から増す、二十五歳に増す、三十五て倘増す、四十五て増す、四十五位て極點になつて八十位になると千に付て一と云ふ風になります。

それて病氣は男と女と分つて云へば大抵の病氣は男が多いが、生殖器の病氣だけは婦人に多いのであります、それから急性――極く急に起る病氣も矢張男に多い、けれども慢性に長く煩ふ病氣は婦人に多い、それて斯う云ふことが分る、婦人の方の病氣は男の病氣よりも長く煩つて死ぬる、つまり婦人の病氣は煩へば長い、老衰て以て死ぬのも婦人に多い、男は老衰などて死ぬ數は少い、男女年齢社會の狀態土地の關係とて以て病氣の引ッくるめての違ひは今御話した通りてあります。

そこて是迄は一個の人に付て御話致しましたけれども人間が集つた此團體、人間が集つた團體に付てお話すると斯う云ふ違ひがあります、例へば此人間が集つてまだ幼稚の時代野蠻の時代と文明になつた時代とは大變に病氣の形が違ふ、野蠻時代の病氣は重もに怪我をするとか或は僂麻質斯とか「ペスト」虎列刺、斯う云ふ風な激烈な傳染病が多い、其外癲癇とか云ふ風な病氣を除く外はさう多くない、而して此團體の組織が緻密になつて所謂文明と云ふものが進むに從つて身體の組織は之に對して色々働きをしなければならぬ、それて或は酒を飲んて色々の病氣を起す、或は色々の不潔な病氣がある、傳染病でも忌むべき傳染病がある、ペスト虎列刺の如き猛烈なる病氣は野蠻病てありますけれども、文明の人の間に來る病氣は慢然と其毒を次第次第に及ぼして後に滅亡する迄になる、又其外に公に言ふを憚る所の傳染病がある、さう云ふ風の病氣は所謂文明病てある、それは人間の團體が進んて來て所謂文明病の爲に人種が全く滅亡した例は幾らもあります、又文明病の爲に殆ど滅亡の端緒に來て居る人種もあります、此滅亡の一番初めに顯はれますのは人間の身體に出て來て、色々其徴候がありますが一例を申せば子供を

産まなくなる、さうして神經系の病が多くなる、生存競爭が劇しくなつて金を儲けなければ飯が食へないつまり世の中が進むに從つて心配が多くなつた爲に神經病が起る、日本でも隨分近頃になつて澤山殖へました、社會の文明が進むに從つて病氣は增すとも減りはしないことであらうと思ひます。

只今迄掻摘んでお話しました所で病氣と云ふものゝ起原は既にお分りになつたと思ひます、而して此病氣は種々の事情で顯はれ方が違ひ、其病氣に罹る人も違ひ、さうして其病氣で死ぬる數も違ふ、之を委しく調べるのは是は醫學の範圍であります、醫者をやらない御方が自分の身體を衛る、衛生の爲に知つて居らなければならぬことは此病氣と云ふものはどう云ふ風のものである、身體の模樣が違ふのと外界の模樣が違ふので色々の病氣が起る、斯う云ふ事實を御承知になれば宜いのであります、其事實が分つてそれから此病氣を豫防する、斯う云ふことは此次にお話をするので確に御了解になることゝ思ひます。

序に申上げて置きますが、近頃の雜誌などには往々病氣の治法の事が書いてある、例へば、自分が肺炎に罹つたとする、肺炎と云ふ病氣は熱があつて咳が出てさうして肺に病氣があるのであります、新聞雜誌などで肺炎にはどう云ふ藥が宜いとあつても、自分で直ちに之を用ゐることは危險であります、此肺炎が男であるか女であるか、子供であるか老人であるか、又其人の性質に依て模樣が違ふ故に此病氣を療治する場合には先づ醫者が醫學の智識で其人の體質を調べる、其人の年齡を調べるそれから男女を調べる、其次に外界の刺戟物を調べる、其他種々の事項を調べてさうして初めて其人の病氣を治療することが出來るのであります、單に自分が肺炎であるからどの藥が宜いと云つて自分で用ゐていけませぬ、或は體質に依ては反對の治療の結果があるかも知れませぬから、自分で療治などをしては其害は案外强いことがあります、私が病氣のお話をするに付ては

特に此事は御注意を願ひたいのであります。何分にも要點を摘んでお話することでありますから或はお分りにならぬ所があるかも知れませぬ、それは此次に尚能く御了解になるやうに御話を致したいと思ひます。

大家談叢



●避暑客の注意

大分暑氣も強くなりますから今年は戰後のこととて何れの避暑地も定めて賑ふことでしやう之に付いても結核患者なども大分入り込みますから充分の注意を拂ひにならねば避暑に行きて却つて傳染病を得る不幸が來ります熱海では結核患者の來浴を斷然謝絕すと云ふ決議をしたそうですが、今日の有樣では避暑地が病毒を媒介せぬとも限んのです今日までの研究によれば結核の傳播を防ぐ方法としては咯啖の始末を嚴重に取り締るより外に有効な方法はないので各國共に之に苦心して居るのです彼の合衆國は有名な啖唾國でありましたが罰金刑を施きてより大に面目を改めたと云ふことです北里博士の談片に曰く避暑客のみならず一般の旅客に取りて最も危險なるのは宿屋の夜具ですと。

△内務省の取締規則に據ると、宿屋營業者に對して、種々衞生上の規定も設けてはありますが、總ての宿屋が後生大事に其規則を守つて居るかと云ふと、其は殆んど覺束ないので、又實際其勵行を强ゆる遑がないのです。

△ソコで今日の旅館の有樣は、結核患者の被て寢た夜具を、別段消毒もせずに、其儘他の客に用ゆることは敢て珍らしくないので實に是ほど危險のことはありません。

△總ての宿屋をして、結核患者は一切泊めぬと云ふ事にすれば、是ほど確實な事はないけれども、宿屋

の亭主に專門の知識がない上は、果して結核患者であるかないかを見分けることの出來ぬ場合もありますから、是は到底行はれますまい、我々專門的の眼て見てすら、表面は左程でなくても、實際其咯痰を撿査して、始めて其二期以上の患者であるとを發見することが往々あります。

△然らば宿屋が皆公德を守つて、一旦結核患者に被せたる夜具類は相當の消毒をしてから後、他の旅客に供することにすれば可いてすが、今日の程度では一般の宿屋に對て、之れを強ゆることは甚だ難かしい。

△シテ見れば、患者其自身の公德心に訴へて、宿屋に泊る事を遠慮さするか、左もなくば一般の旅客が自衛的の注意をする外はないのてすが、患者をして宿屋に泊ることを遠慮せよと云ふには、別に患者に限る收容所――收容所と云ふのも不穩當てすが、相當の設備をした結核療養所を設けねばなりません。

△將來結核療養所と云ふものが、到る處の海水浴場などに出來て自ら、健康者と患者と離隔され〻ば、夫れこそ結構てすが、今日ては先づ自衛的注意の外に豫防策はないのてすから、先づ是から海水浴へても出掛けやうと云ふには必要携帶品の一として、シーツを用意することを忘れてはなりませぬ、イヤ別にさう大きくなくても可いてす、小さいのが二枚もあれば澤山てす、

△日本人の習慣として、兎角此夜具を被つて寢る癖がありますが、是は頗る危險の習慣てす、何故ならば、モウ結核も三期に入ると恐ろしいもので、其咯唾は勿論涎にまでも無數の黴菌が居て甚だしいのは嚏にすら附いて出るてありますから、我々が普通患者に接しるには、少くも三尺の間隔を保つと云ふのが通則てになつて居りますが、斯う云ふ患者の被た夜具には、必ず多くの病毒が附着して居るのは當然の事てあります。

△殊に重症の患者になると、夜間咳嗽が劇しい、隨

つて夜具の襟を口に當てゝ寢ますから、どうしても餘計病毒が附着するソコで、始めてシーツの必要が起るのですが、其外にも尙ほ注意すべき箇條は決して少くありません。

△シーツを携帶するのは、此危險なる夜具の襟を掩ふたり、又蒲團の上敷と爲す爲めなのでありますがまだ此外に注意せねばならぬのは、宿屋で使ふ烟草盆の灰吹です。

△宿屋の灰吹が危險であることは其夜具の危險なると同一で敢て說明は要りますまいが、中には此灰吹へ啖を吐いて、其緣で脣を磨る人などがある。是等は最も不注意の極と云はねばなりませぬ全體斯う云ふものは全廢して了つて、室內に置かぬことにするものが宜しい。

△イヤさう云ふ自分の此應接室に、而も貴所の面前に麗々と灰吹を備へて置くのは、甚だ自家撞着の誹りを免れませんが、宿屋などでは是非共之を廢して彼の消毒裝置のある唾壺に改めたいのです、

△病毒傳染の直接媒介となるものは、先づ夜具が第一で夫から灰吹などでせう、種々の食器も亦危險ではありますが、是だけは日本の良習慣として、如何樣な下等の飮食店でも、一度客に供へた食器は兎に角洗ひ淸めた上でなければ、再び他の客に用ひることとはしない、之が若し支那人流に唯一寸拭いた位ゐで又用ひられたら、隨分危險至極の次第でありますが、必ず之を洗ひ淸めるとに依つて病毒の傳染は防ぎ得られるのであります。

△夫から空氣傳染と云ふことも、日本の家屋の構造が至極換氣に、都合よく出來て居る爲めに、先づ心配は少ない方であります、要するに以上の注意の外常に運動を怠らんで絕えず肺に新空氣を充たし、血球を殖やすことが之が第一の豫防法であります。

△又肺結核も初期の中なら、必ずしも全治せぬ限りはないので、現に獨逸の貧民療養所の統計に據ると第二期の患者で百人の中二十人までは全治して居ります、ですから頓て豫防接種が的確に奏功する場合

も來るのでせうが目下の處は兎に角自衛的豫防が肝要です。

△聖路易では結核患者があれば、必ず主治醫から其筋に屆出づべき事になつて居て、患者に對する夫々の制裁もありますが、是は今日の日本には恐らく行はれますまい、否な日本のみならず、英國でも獨逸でも行はれて居りませぬ。

△況して日本には比較的上流人士に、結核が多いから、之を拘束する樣な規定は容易に成立たない、日外の伊藤内閣には國務大臣に二人まで、結核の而も第三期に入つた人が在つた位で……

△日本の上流人士に、なぜさう結核患者が多いかと云へば種々の原因もありませうが、主として運動の不足から來るのです、どうか避暑に出懸ける人々は、唯遊山を目的とせずに、一運動と云ふことに重きを置いて貰ひたいのです。

實驗上の育兒

此篇は瀬川博士に乞ふて抄錄の諾を得たる前號よりの續稿なり

●共寢の注意と服裝

醫學博士　瀬川昌耆君

▲共寢にも弊害伴はる　私は哺乳兒と母親と共寢する事の利益を述べましたが利益と共に又危險なる弊害の伴はれるのであります、尤も是れは母親の不注意から多く起る事であるが幾らも世間に見受る例です、夫れは即ち乳房の窒息で無慘にも小兒を死に至らしめては育兒上衛生の注意も何もあつたものではありません、詰り母親が添寢をしながら母乳を與へて眠さの餘り知らず〳〵其儘寢込んで仕舞うからです、故に共寢をして乳を飲ませるとき母親は育兒の責任を忘れず、乳房で窒息させる樣な失態のなきや

う必ず充分注意しなければなりません

▲共寝の注意　又共寝する時には斯ういふ注意を致さなければなりません、母體に接したる方は小兒の身體が餘計温いので接しない方の一方は其の割合には温くまないものです、夫れ故小兒の掛け夜具は母體に接せざる方へ餘計に厚味を加へなければなりません、先づ毛布を掛けるとすれば母體に接せし方は一枚で可いが、接せざる方は、三枚にしなければならぬと云ふ之れは其の一例でありますが此趣意で掛けものをなして共寝を仕なければなりません、御經驗なされば此事は屹度事實の上に於て御悟りになる事でありませう。

●小兒の虫及び疳

▲蟲の卵が孵化す。　處で胃腸に棲息する虫も何うして此處へ生いたものか其の原因がなければならぬ、之れは即ち飲食物に是等の虫の卵又は子蟲が附着して居て知らず、識らず之れを體内へ嚥すから、遂に胃腸に於て其の卵が孵化するのです先づ胃腸に棲息する五種の蟲の卵は如何なる場合から體内へ這入るか夫れを說明する必要があります、此蟲は「さなだ蟲といつて、御存じでもあらうが節のある頭の方の細い尾の方丈太い、長さは一丈餘に達するさへあるので、多く鱒とか鮭とか牛豚の類に居る寄生蟲です故に鱒鮭牛豚などの生肉や、生煮ゑの肉を食べると稍もすれば絛蟲に冒されます、ケレども小兒は餘り此類の肉を喰べぬから比較的小兒には絛蟲が少くない。

●蟯蟲

之れは水よりも寧ろ食物から傳染するので此蟲の卵が色々の食物や物體に附着して居るのを知らずに食したり嘗めたりして其の卵が胃腸に於て孵化しますが小兒の腸内には此蟲の棲息する事が多いので、往々肛門から外へチョロ〳〵這出し、爲めに小兒は非常に痒味を覺え煩悶する事がある。又女兒などは此蟲が陰部へ這込み大に痒ゆがつて困る夫れを痒くために肛門の周圍へ雌蟲が生みつけた卵を指の先や、

爪の間に附着け、夫れを嘗めたりすると、其卵が腸內に這入つて又更に蟲に孵化せしめます、斯ういふ順序で小兒は絶えず自身で蟲を增殖して居るし、又卵が衣類や物品に附着し、後には誤つて家族の者の口內に入る事もあるから卵て腸內に這入つて孵化する蟲は時として家族に迄漫延することが往々ある、次に示す蛔蟲の傳染發育の狀態なとも矢張り蟯蟲と略同じ性質のものであります、併し此蟲は別段甚しく身體に害を及ぼすのではない若し又多くの蟯蟲が腸へ生いたら驅除法は容易く出來る（蟯蟲の原寫も示されしも彫刻の時日切迫せしにより遺憾ながら玆には省くこと丶せり）頭部鈎なりになつて居る方は雄で、長い形をして居るのは雌です、又顯微鏡で見た蟯蟲の卵も示されたり。

●蛔蟲

蛔蟲は一般に廣がつてゐる蟲で何人も御存じでせうから玆に說明を要する迄もあるまい、ケレど前に云ふ通り此蟲は或る場合には小兒に害を與へることもあるし其上小兒の胃腸內には多く棲息するので大抵水又は卵の附着した食物から傳染します、併し尙申し添えて置きたいのは絛蟲にせよ、蟯蟲にせよ、蛔蟲にせよ、十二指腸蟲にせよ、此等の蟲の卵は全く肉眼には見えぬので顯微鏡を以て始めて發見されるのであります

⊛鞭蟲

此蟲の卵も多くは水から人の胃腸內に入るので別段腸內に棲息しても害はないのです、圖乙に示す右方の圓形は即ち顯微鏡にて見たる鞭蟲の卵で、左方に鞭狀をして居るのが鞭蟲の原寫であります。

▲十二支腸蟲　之れは腸に寄生する五種の蟲の內で最も危險な、極めて有害な蟲で腸壁に食込み血を吸つたり、又多分に一種の有害物を排泄して人の血液を惡變せしめるから、其人は段々貧血し皮膚は蒼白色になり心動がたかぶり呼吸が短くなつて少し身體を働かすと忽ち息切れがし働く事が出來なくなる、之れが一層甚しくなつて、床に就くやうになると身

體衰弱して斃れて仕舞ふ此病氣は東京にもあるが地方によつては中々蔓延し一町村侵されない家は無いと云つても宜い位に流行してゐる處がある、扨此蟲は長さ三四分許りの小蟲で小腸に寄生し雌蟲は時々其卵を排泄するから病人の大便中には必ず其卵を認めます、て排泄せし糞便に十二支腸蟲の卵が交つて居ると夫れが外で孵化て子蟲になり子蟲が體内へ還入ると今度は眞正の十二支腸蟲となるのです處で之れが何うして日本人の腸内には多く繁殖のであらうか夫れは我國では大便を肥料とし大便が肥料の重もなるものになつて居るソコで日本人は野菜類を多く生て喰べるので其大便の肥料の中に十二支腸蟲の卵尚詳しく云へば子蟲が交じつて居れば野菜へ其の子蟲が附着するは必然なる譯です、例へば菜とか大根の莖などに此子蟲が附着し居るのを生の儘とか又はザッと鹽で揉んで喰べたりすると此子蟲は其儘腸内へ入り多くの親蟲になつて繁殖するのです故に先づ大便の肥料を注ぐ野菜だのまた農業者は不潔の土壤で手指のよごれてゐるのも構はず食物を掘み食ひしたりするから自然手指の媒介で次第に此蟲が増殖して來る故に此病氣の殊に田舍に多いのも畢竟之れが爲めであります。

▲外國にある例　又日本許りでは無い西洋でも以太利の或地方の下等社會抔には多く流行して居ます、下等社會と云つても土方や煉瓦職のやうな砂いじりをする勞働者に多い、其故は土方などは土に汚れたる手でもかまはず食物を摑むで喰べるが既に土の中には此蟲の卵が交つて居て夫れを知らずに土方抔は汚れた手で食物に觸れ夫れから夫れと遂に一種の流行を醸すに至るのである

▲哺乳兒には蟲も癇も無き筈先づ腸内に居る蟲と云へば以上說明せし五種の蟲に外ならぬが斯く腸内へ生ずる蟲は何れの種類を問はず自然に生ずべき道理はない、即ち小兒が生れ乍らにして蟲を持つて居るものは決してないのです、孰れも皆生後外界から體内に入り來るものであるソコで是等の蟲類の侵入す

る媒介物は何んてあるかと云ふに前にも述べた通り日常の飲食物にあるので飲食物に是等の蟲の卵が附着して居るのを知らず識らず胃腸へ嚥下したからで其の卵が遂に蟲に孵化するのです、處で之れが御諒解になつたら私は斯ういふ論斷を下だすのです、民間で唱へる蟲や疳を假りに一歩を讓つて胃腸に棲息する蟲と同じものと見做したら、哺乳兒時代の母乳ばかりて育つ小兒には蟲や疳はあるべき筈はないのてありませんか、何故ならば此時代の小兒は母乳の外何一つ飲食するでなく、且つは乳房から小兒の口へ直接に觸れ決して蟲の卵などの胃腸へ入る機會はないのです、斯く母乳ばかりで保育しつゝある哺乳兒でも民間にては、「此兒には蟲が起つたとか、夫れから疳がたかぶつて自烈て困る」と云ふてせう、爾うして見ると俗間に言傳へられる蟲や疳は全く胃腸に棲息する蟲を云ふのてなく外の病氣を指して云ふのである事が充分お解りになつたてせう、然らば蟲及び疳と稱する其病原は何てせうか次に說明致しませう。

▲疳及蟲とは何んぞ　是迄の說明で普通體内に棲息する蟲の種類と古より、民間に唱へられて居る疳又は蟲とは、全く別の種類てある事がお解りになつたてせう、玆に於て疳の蟲とは如何なる性質のものか何ういふ病症のものであるか此問題をお咄し致さうと思ひます、民間で云ふ疳も蟲も之れは同じものて其の病原は第一が神經過敏のためである、第二は小兒の悪い習慣からも來るのです、哺乳兒時代を過ぎると多くの小兒は悪るい癖に染まり易く自烈て泣けば親が色々と機嫌をとつて呉れると云ふやうな一種の考へを起し少しでも親達の慰めやうが悪いとツイ／＼火の付くやうに泣き立てる、斯ういふ事が度重なると親達は「此兒は疳が起つた、又蟲が起つた」と云つて醫師に見せる、醫師に見せるなら未だしも之れに對して蟲封じをするとか、疳ほりなどする、悪い癖の爲に自烈る兒が何うして蟲封じや疳ほりで癒りませうか、實に飛んでもない誤解で、斯んな迷

信を抱いて居ては到底惡癖を矯正する事など出來ますまい、夫から又疳とか蟲とか云ふ處の惡い癖は多く小兒が大病の後に發するもので之れは甘やかし過ぎて何事も教訓する事なく唯々小兒の機嫌をとり滿足せしめ樣と思ふから遂に夫が小兒の惡癖となるのです。

▲大病後の小兒　次に大病の後などは多く小兒も身體が衰弱を來し神經過敏になり易いもので、惡い癖と神經過敏と双方が一緒になるから大病後の小兒は民間に云ふ蟲とか疳とか云ふのが起ることになるのです。

▲疳及蟲のある小兒　又腦病のある小兒なども非常に自烈て泣いたりするが茲に云ふ疳の蟲抔とは全然症狀の違つて、居るものです、左れば民間にて謂ふ疳及び蟲等は怜悧なる小兒に多い病氣で、鷹揚な痴鈍なる小兒には至つて稀であります。

▲疳及び蟲の愚說　之れを要するに一種格別な疳の蟲などと稱するものは、全く有るべき理窟は無いので即ち之れは一時神經系統の興奮する狀態を云ふのであります、故に斯く神經の過敏から來るのは、附ら親達が心配せずとも之れは自然となほるもので周章狼狽し「蟲の爲めに死ぬやうなことでもありはせまいか」抔と取越し苦勞するのは實に愚の至りで御座います、て万一餘り神經が過敏になり過ぎれば鎭靜する藥があるから夫れを投ずれば直きに恢復するものです、神經過敏にあらずして若し小兒の惡い癖から自烈なり泣いたりすれば夫れは親達の教育法によつて恢復することが出來ます疳の蟲などは決して小兒の體內に居るものでないことを私は證明いたしますから此樣な愚說に迷つて餘計な心配せぬやうに致されたい。

●婦人の神經

●此篇は吳博士の說かれたものにして婦人直接の關係を有するいと有益にして興味ある談片なり

婦人の神經と言ふて別に男子の神經と變つた神經が

ある譯ではないが、未だ神經病と稱するまでには至らないがさりとて尋常では無論ない、所謂病的と尋常との中間に在る一種特別なる狀態即ち名づけて神經質と言ふものが男子よりも比較的婦人に多い樣であるから今こゝに神經質に關する特徵治療等を婦人を中心として少しく陳べて見樣と思ふのである、この神經質なるものは輕々に看過してはならない實に恐るべきものである、と言ふのは未だ病的と稱すべき程のものでないから本人は固より家族も餘り多く之に注意をして居ぬが然し一歩誤ると立派な神經病者　即ち狂者となるのは固より或は厭世觀を起して自殺をしたり或は身に何等の疾病もないのに勝手に病人なりと信じて眞實の病人になつたり其他色々樣々な危險なことをやるのであるから既に神經質たる者は本人は無論家族の者もよく其特徵に注意してこれが治療法を怠たつてはならぬのである、神經質の特徵はなか／＼其種類が多いから悉く列擧することは容易な事でないから重なるものを列擧して其他はこれに依つて類推せしめ樣と思ふ神經質の者は常に身體が變動しつゝあるのである今まで氣持が好かつたのに直ぐ氣持が惡くなつたり左樣かと思ふと又直に氣持が好くなつたり其心持が變轉極まりないのである、それと同樣に肉體の上にも常に變化がある、肥滿て居つた者が急に痩たり痩た者又肥滿たりすることがある、又人に對する愛憎の念が常に一定して居らない昨日まで非常に愛して居つた者が俄に憎くなつたり今まで憎むで居つた者が急に可愛くなつたりするのでこれが相手は堪つたものでない、人に對するばかりでない食物其他の物品に對してもさうだ牛肉が大變好きであつたのが急に嫌になつたり嫌であつた天麩羅が俄に好きになつたり、又物品の嗜好も常に變るのである、中にも斯う言ふ神經質がある其は或る一種の物が食へない例之ば果實の類は一切食へないとか魚類は何でも食へないとか其は何の理由もなく唯食ふことが出來ないのである、其れと反對で通常人間の食はない物を無暗と食ひたがる者も

ある、同じ神經質の中でも飛でもない間違を惹起さす頗る危險な連中がある、其は何でもかんでも虚言を言ふのである、尤も必要なる場合に虚言を言ふのは誰でもやることであるが、其が何等の必要もない寧ろ其の虚言が自分に不利益なる場合でも平氣で虚言を言ふのである、斯う言ふ連中は自分では其虚言を虚言と氣附かないので否氣附ないどころでない其を眞實なりと信じて居るのである

又身體の彼方此方が何の異狀もないのに痛むで仕樣のないと勝手に苦むで居るのもあれば或は時々熱が出たと言ふて醫者の所へやつて來るからこれを診察して見ると少しも熱がない其でも當人は熱があると獨りで騒で居るのもある、中には何時でも汗をかいて居る者がある寒中でも他と話でもして居ると額から汗が流れて來る當人は恐らく氣が附かないであらうがこれ等も確に神經質の徵候であるから注意をせねばならぬ、殊に婦人は月經に氣を附けて居なければならぬ月經が不規律になつて來れば神經質たるの徵候である、神經質も少しく烈しくなると幻覺錯覺をやる眼前に何物もないのに色々樣々の物が見えたり机が虎に見えたり茶碗が鼠に見えたりするのでこれ等は一歩間違へば確かに狂者である、又素人は唯癇だとか癖だとか言ふて餘り注意しないが此の癇なり癖なりが一種の神經質で何でもない事を無暗に怒つて見たり意味もなく顏を動かしたりするのが次第に烈しくなると隨分危險なものになる、又中には無暗に物事を疑ひ出し何でも彼でも疑問を發する者がある例之往來を見て何で人が道路を歩くんだ彼の人等は皆何所へ行くのか何所で寢るのかなぞ要らん心配をして居る者がある、殊に婦人に多いのは自分の夫に無暗と無理を言ひたがる神經質で何事によらず夫の言ふ事に反對したがるのである唯に夫の意見に反對するのみでなく自ら難題を持ち出し夫の困る顏を見て悅ぶのであるから夫たる者は好い災難だ、又神經質の者は同情の念に非常に變調を來して居る同情すべき場合に甚だ殘忍であつたり同情すべから

ざる時に同情したりするから時に依つて大變殘酷な人間となつたり又情深い人間ともなる、其他身體を無意味に振つたり吃たり無暗に唾を吐いたり安眠が出來なかつたり記憶力が惡くなつたり樣樣變つた行動をする者は大抵神經質から來るのであつて其まゝに捨置くとに依ると眞物になるから餘り甚しくならない中にこれが治療をなさねばならぬさて其治療は如何したらよいか

さて此の神經質は如何にして治療すべきかと言ふと大抵誰れでも神經質の者は其傾向を幼年時代に現はすものであるから幼年時代に是れを治療矯正しなければ年と共に甚しくなつて遂に立派な狂者となる恐れがあるから世の親たる者は充分の注意をなさねばならぬ殊に是れは幼年時代には最も人目に附き易いから此の時代に於いて矯正せねばならぬ、中でも最も危險なのは天才である幼年時代に大人を驚かす樣な天才は隨分世間に在るがこの天才程危險なものはない一歩間違へば確に狂者である、其を親は其樣な事には氣が附かないで他に褒められるのが嬉しいので無暗に物を教へたり又は其子の天才を誇る爲に宴會などを催して揮毫をさせたり音樂を演ぜしめたりするがこれ等は最も宜敷くないことで其子の神經を害することは非常なものであるから天才の兒供に對しては頗る平凡なる教育を爲さねばならぬ、然し其子の才能を傷つけない樣に天賦の才能と傾向とに從ひ教育して行かねばならぬことは言ふまでもない、又兒供は多く感情に走り易いものであるから成るべく感情に走らさない樣に注意せねばならぬ、それから親の最も注意を要するのは總て兒供は一般に親を見習ものであるから兒供を教育せんと欲せば先以て自ら教育せねばならぬ、兒供の神經質を治療し惡癖を矯正するには必ず自分の神經質惡癖を愼ねばならぬ、次にはこの神經質の兒供を持てる親の注意して居らねばならぬことは神經質の者は色情の發達が非常に早いので親は未だ全くの兒供だと思ふて居る中に既に成熟期に達して居るから色情的の關係から色

々の間違が生ずるのである、又近頃青春の男女が厭世觀を起して自殺する惡い傾向があるがこれ等は幼年時代の讀物に親が注意をしないのが確に一個の原因をなして居ると思ふ、それは兒供には決して假空的懷疑的哲學的の思想を注入してはならないのに此節の御伽話の本を見るに何れも假空的懷疑的哲學的なるには驚くの外はない、こんな危險なものを兒供に讀ますことは餘程親が注意をせねばならぬことである、これと同樣に遊戲に一定の制裁を加へねばならぬ、世間の親は危險な遊びでさへなければ如何なことをして遊でも一向平氣であるがこの遊戲と言ふものは非常に兒供の神經に影響を與ふるのであるから好く注意をせぬと飛でもない結果を來たすとがある

尚右豫防上に就て呉博士の說かれし有益の談片を紹介しましやう

▲神經質の豫防　別に取り立てゝ云ふ程の名案はなけれど

▲第一が敎育なり殊に遺傳性の心經質ありと思はるゝ時は一層注意して敎育せねばならぬなり先づ其少女の天賦の才能の方向に從つて自由に發達せしむべし强て矯めて他に向はしむる如きは不可▲第二感情を抑ふべからず寛嚴最も宜しきを得て若し過失などのありし場合には徐ろに之を訓諭すべし▲第三遊戲に一定の制裁を加へ幼より男子の遊戲と女子の遊戲とを混淆すべからず又男兒と共に遊戲せしむる如きは大に避けざるべからず一般に神經質婦人の春期發動は他に比して一層速かなるものなれば男兒と共に遊ばしめて愈々其春情を挑發せしむることあり▲第四お伽話しに注意せよ昔より日本に行はれしお伽話しは勸善懲惡のものにて左まで害はなかりしも近頃舶來せしものは荒唐無稽のものゝみにて動物を人間に作り人間を動物に變ぜしむるなど一として妄想の種ならぬはなく兒女の神經質を益々神經質たらしむ傾きあり▲第五小說に注意せよ戀愛小說など云ふものが神經質婦人に大害あるは云ふまでもなきも

のにて殊に譯の判らぬ著者共が時流に投ずる爲めに舞文せしものに於いてはなほ更なり▲第六虚榮心を防げ假令へば少しばかり學校の成績か能かッたとて貸し惡かッたとて叱りなどして學業を勵ましむる如きは不可なりさなきだに神經質のものは人の上に立ちたがる癖あれば好く〳〵注意すべきなり▲第七子女を主賓となすべき集會を催ほすべからず是れは東京などには能くあることにて其の令孃が三味線が甘いとか義太夫が甘いとか云ふ場合に於いて知友親戚を招き令孃を此會の中心とし其三味線なり義太夫なりを聞き寄ッてたかッて褒めそやすことあり斯る事は虚榮心を養ふものなれば不可なるは當然のみ▲第八忍耐心を養へ之を養ふには健全なる宗教或は道德倫理の學問が最も宜し▲第九哲學的知識の注入を避けよ現今の教育には形而上の學則ち哲學的方面の教材が餘りに多ければ之を削除するが可かるべし最も道德倫理は仕方なし何れにせよ厭世など云ふは斯る教育より來る▲第十職業を選べ▲第十一娛樂を選べ

▲第十二規則的生活をなせ次に療法に就て略述せんに神經質婦人は實際は病氣でもなきものを病氣なりと思ひ大に苦むことある事前述の如し斯る時醫師の是を診して「氣の病ひ」なり心配するなと取り合はぬは不可なり元來氣の病氣と云ふはなき筈にて苦いと云へば苦いので肉體的に苦くないとか或は病氣であるないとか云ふことは問ふに及ばず患者は實際病氣の通りの苦痛があるのなれば之を除きやるの法を講ぜねばならぬなり例へば手が痛いと云ふ時は眞に痛める箇所はないにせよ水でもなンでも痛めりと云ふ所に注ぎ繃帶でも仕てやりて明日十時迄には乾度直ると云ふて置けば必ず直るものなれど若し此時少しにても患者に疑ひの心を起さしめ或は直るものではないと信ぜしむる時は如何にしても直らぬなり斯くして彼の醫者此の醫者と轉々して東京中の醫者總てに診て貰ッたものさへありされば醫者は斯る患者に對しては輕卒の擧動をなさず最も信用を得べき手段方法を執らねばならず又此の患者は海岸の如き見晴

し能き病院にて治療し其病院も院長あり副院長あり醫員あり看護婦ありと云ふ如き堂々たるものよりは醫者一人にて一から十までの世話をする如き所が特に好し云々

●神經衰弱豫防法

此篇は狩野病院長狩野謙吉氏談片の概なり

▲(八)マラリヤ　是は俗に瘧又はおこりと言つて居りますが其病原は近年迄も不明で不潔な土地から發散する惡い氣を受て罹るもの丶樣に老へて居つたのてあるが今より八年前即ち千八百九十八年に英國軍醫のロスと云ふ人が研究に研究を重ねて此病氣は身體血液内に寄生する原蟲族に原因するものてあると云ふ事を發見した、扨其原蟲族が如何にして血液中に寄生するかと云ふに此病氣の媒介をするのは夏になると皆さんが苦められる蚊てありまして此蚊が人の血を吸取る際其口の端から人の血液中に種を蒔くのが抑も寄生する原因なのてあります、西洋には昔から蚊の多き所にマラリヤ多しとの俗言があつたとの事て此俗言に因て研究をしたところ其結果、最初蚊の體中にて原蟲が發育しさうして其蚊が人の血を吸ふと、吸はれた人が蚊の爲にマラリヤ原蟲と云ふ頓てもない御土産をされ其爲め此病氣が起ると云ふ事が發見され其原蟲には三日熱原蟲、四日熱原蟲、惡性熱原蟲の三種類ある事迄明かになり、同時にマラリヤ豫防法も一變して蚊を防ぐのが第一てあると云ふ事になつて參りました。

▲(九)原蟲の生活及繁殖　蚊から人がマラリヤ原蟲の種を蒔かれるとそれが血液中の赤血球と名づくる赤い球の中にすかみ付いて赤血球の滋養分を吸て成長し此處て一つの原蟲が子を造り孫を造り、其間に赤血球の滋養分はなくなつて來て圓い球の形も壞れて仕舞ふ、壞すと今度は別の丈夫な赤血球にすがり付いては又幾つにも繁殖する、斯くして一寸の間に一つの原蟲が何億と云ふ驚くべき數に達する、其原蟲が多くなればなる程赤血球が多く壞されて不足に

なる、そこで自然其人の身體は衰へて色光澤が惡くなつて蒼白となり、重いのは青黑く汚穢い色と成り來る、マラリヤ患者の戰慄たり熱の起つたりするのは原蟲の繁殖力が盛んとなり赤血球の壞される數が多くなつて來た時で僅である間は戰慄も熱も起らない、血球が壞れると營養不良を起すから從つて神經の營養を害するは當然である一體此マラリヤと云ふ病は御存じの通り一日隔、二日隔或は又每日同じ時刻に劇しい戰慄て大熱と大汗とに苦められるもので夫が發作度每の苦痛と云つたら拷問や火責め水責めも同樣であるから是許りでも神經衰弱を起すに足るのに搗て加へて營養不良迄手傳ひをするし夫れに又此病の特効藥なるキニーネが幾分か神經を害する性質を持て居るなど彼是れ神經衰弱の原因となるのであります。

▲(十)豫防及治療　マラリヤに罹らない樣にするには蚊を用心するが第一である事は已に御解りになつた筈、若し一旦罹つた以上は早く原蟲を殺す事をしなくてはならぬ、其方法は即ち治療を醫者に賴むのであります、昔は早く落すとよくないとか餘病が起るとか言つて居つたが左樣な事は決してない、原蟲を一ツでも多くしない樣に早く治療し全治後も補血及强壯の治療を怠らぬ樣せねばなりませぬ。

▲(十一)梅毒　梅毒の傳染する事は餘程昔から知れて居つたもの、場所が場所丈け何分隱して置くので此病氣は減ずる所ではなく年々增加一方誠に困つた次第、一體此病氣は男女情交から主に傳染し間々煙管食器などの類からも傳染するし又乳母などよりも傳染するから此三點にさへ注意すれば容易く防がれる譯で他の傳染病の樣に空氣とか水とか飲食とか將又衣服とかの類迄からも傳染する樣な事はないから其患者は多くない筈であるけれども實際は交通機關の進步に連れひどひ勢で增加して來て居るので茲に妙な一例があると云ふ次第は五年程前に警視廳第三部で調べた事があるが其年或る大集會があつて地方人が多數東京に入込んだのが原因て淫賣婦の梅毒

か大集會前の檢黴に比較て非常に增加したと云ふ事であるのだが昔は江戸詰の武士が江戸土產に地方へ梅毒を持つて行つたと云ふが今地方から持て來て東京へ置土產にして行く位に各地に蔓延增加して居る事が知れて居ります。　抑梅毒は傳染病中の慢性病で三年五年のは並のもの、長いのになると二十年三十年甚しきは二代三代迄も毒を引くから國家の爲にはペストよりもコレラよりも恐るべき病氣で蔓延增加の極遂には國家を亡ぼすに至ります。

▲(十二)神經衰弱と梅毒　梅毒は何年も何年も潜んで居る事は前に營養の御話をした時にも述べて置ましたが潜んで居ても只は居ない一年二年と小兒が成長する様に一期二期と成長し何時の間にか三期と云ふ大人になつて居る、さうなると大分亂暴を働いて如何なる場所にも自由に入り込み腦へでも骨へでも勝手次第、俗に骨がらみと云ふのが即ちそれであります、斯く成長する前にどうして居るかと云ふに種々故障するのもあればそつと身體を窘めてゐるのもあります、故障するのは春秋に皮疹と云つて身體にぼつ〳〵と痒いふき出ものが發るとか頭髮の生えぎはに發疹するとか目がわるくなるとか手足の關節が霖雨の時ごとに痛くるしいとか種々な變りが起るのを云ひ又そつといぢめるのとは默つて引込んでる樣で其實身體の營養を減らしながら絶えず神經に苦勞を與へて居るので其爲遂には神經衰弱に陥つて仕舞ます、之を實驗するに三期梅毒に神經衰弱を兼て居ないのは殆どない位、二期にても多くは兼て居る、若三期に達したので素人考へで神經衰弱の樣に思はれるならば醫者に精密な診斷を受ないといけない、何故ならば其時は早や神經衰弱より一層重い腦病になつて居るのもあるからであります。

▲(十三)注意の二三　梅毒など〻云ふ不名譽な病を受ぬ樣にするが第一の注意、若受たなら充分治療するのが第二の注意、又治療後には攝生を嚴重にし營養を整へ續いては神經の休養を計らぬと折角梅毒が全治しても神經衰弱になるから是もよく注意しなく

てはならぬ。

▲(十四)痳病　昔は痳病も梅毒の一症と心得て居つたが一つものではない、然し痳病と云つても尿道丈の病氣と心得ては大間違で、其治療攝生を怠ると近い場所では攝護腺炎とたり睾丸炎となり稍上では膀胱カタールとなり腎臓炎となつたりする事もあれば夫から又痳毒性膝關節炎を起したり他物の媒介で痳毒性眼炎を起したりするから注意が大事です、此病はドーして起るかと云ふに必ず痳菌のある場所に觸れた後に起るもので大概二日目から八日位の間に病狀が起る、三週間位でよくなるのは輕いのであるが重いのはさう早くはなほりませぬ、一體此病には善い性質と惡い性質とがある惡い性質のものとは傳染する場合痳菌ばかりでなく他の黴菌も混つて來る即ち其多くは醸膿菌と云ふので是と痳菌が共同運動を始めると前に述べた樣に近所隣を荒して始末に困るから輕いと思つて等閑にして置てはいけませぬ。

▲(十五)痳病と神經衰弱　痳病から神經衰弱を起すと云つたら素人は疑ふかも知らぬが實際此病氣は相應に神經衰弱の原因となるもので夫には直接なものもあれば間接なものもあつて一樣ではない、此病氣の患者が一晝夜に二三十回も便所通ひは忙はしい譯であるが其都度疼痛と云ふ直接の刺戟があり夜もきれ〴〵の睡眠で熟睡時間が足らず、病的亢奮から來る情慾を抑へねばならず其外病毒を眼に移さない樣に豫防するにも相當の注意がいるしそれから又治療上からして滋養物を禁じられて淡泊な野菜類丈を食はされ運動が思ふ樣に出來ずにあるから生活上に一通りでない變化が起つて是が彼是三十日永いのになると二ケ月も三ケ月も續くから遺傳的神經過敏な人は早速神經衰弱を起して仕舞ふ、以上は是れ直接な原因、次に間接な原因と云ふのは痳病から睾丸炎となり夫が爲め神經衰弱を起すのであります。

▲(十六)睾丸の病と神經衰弱　睾丸の病の主なるものは痳病から來る睾丸炎、梅毒から來る睾丸炎及睾丸結核等でありますが結核の方は生命に關するか

ら是非睾丸を摘出せねばならぬ、然し摘出後には必ず神經衰弱が起るものであるからそれは承知せねばならぬ、若し單純な炎症であるならば輕いのは睾丸の萎縮位いのは化膿するのであるが兩方の睾丸共此病氣にかゝつたなら子孫繁殖に望みないと見てよろしい、是事丈でも神經衰弱を起すべき筈であるのに其上人生の快樂(是は追々に述べます)にも影響するから一層神經を惱めますので睾丸炎後の神經衰弱と云ふものは割合に多いものであります、此處で一寸注意して置きますが通常痳病に原因するもので素人の睾丸炎と思ふもの丶多くは副睾丸炎と云ふもので睾丸炎ではない是は睾丸炎よりは一般に多い、然し是は精蟲の通ひを害し又其爲め精蟲が少くはなるが精蟲製造力はなくなる譯でありませぬ。

▲(十七)貧血　素人には貧血を一の病症の樣に考へてる人もあるが醫學上貧血と云ふ病症はありませぬ、つまりは貧血を起す病があつて夫が爲血が不足した狀態を指して貧血と云ふので其狀態には一ヶ所が血に不足するのと身體全部が血に不足するのとあります一ヶ所に不足なのは血が循環する管に何か故障のある爲か又は心臟の力が弱い爲かなので手足の冷るなどは即ち此類である、全部に不足するのには種々あつて唯血の分量が不足するのもあれば血の成分に不足するのもある例へば赤血球と云ふもの丈が不足するのもあれば血色素と云ふものが不足するのもあります、血が多いとか少いとか云ふ事は一寸見た許りでは解らない眼瞼とか口中の粘液を檢するとかせぬと本當の貧血であるか何だか判然しない、皮膚の蒼白なのは必ずしも貧血な爲許りではなく外出不足に原因するのもあります、貧血の原因は澤山ある中外傷、手術、痔、胃腸出血、腎臟病、萎黄病、十二支腸虫、子宮出血等が主なるものであるが何に因らず永い間貧血して居ると神經衰弱の原因になります、血が不足だから鐵劑を飲むとか何とか云ふのもあるが夫れは血を増す丈の事で血の不足する原因を治療せねば全治は六ヶ敷いから貧血の場

合には醫者の診斷で其原因を調べる樣にしたいものです。

▲(十八)永い授乳　乳は小兒の發育を遂げる營養分が備つて居る事は申す迄もないが母に取つては夫丈貴い營養分を減ずる譯であるから授乳期が永ければ永い丈身體の營養に影響が來る筈であるが幸にも授乳期には平常より食慾も增し消化もよいから小兒に分配した營養分丈の償ひが付く、然し二年も三年もと續いては保ち切れるものでない、夫は一寸考へても解る事で小兒は一日每に體重が加はる、加はる每に乳の飲み方が多くなる左樣な次第であるから初めの一ケ月二ケ月と夫から經つた後の一ケ月二ケ月とでは母體に影響する度合が違ふそれであるから永くも一年以上の授乳は母體の營養を損害するものと見て差支がない夫も健康な母體の事で若し母體が虛弱だとか貧血だとか神經質だしか云ふ場合には初めから乳母又は牛乳で發育する事にせねばなりません。

▲(十九)多乳　是も永い授乳と同じ結果を見ます、多乳とは乳の出方が非常に多いので小兒が充分に飲んでも飲み切れぬ程で自然身體が衰へ貧血を起す事になる此害のある多乳を素人は誇る樣にして居るのは誤りで中には多乳と云ふ病の部に入れねばならぬのもあります、兎に角乳を永く出すのも又多く出すのも道理から言ふと同じ事で何れも身體の營養を損害し其爲め神經衰弱の原因となる事が往々あります。

消耗により營養損害を起し其爲め神經衰弱となる病氣の種類は是で一通り述べ盡したから此次からは中毒に因り營養損害を起すものを御話致しませう。

●トラホームの話

此篇は東京眼科病院長井上豐太郎氏の談片にして前號の續とす

此病氣は惡性であるが、其初め輕く來ると云ふのが此病氣の特徵である。初めから痛むとか、非常に眵

が出るとか、眩むとか、物が見えなくなるとか云ふやうな病氣ならば、患者は決して抛つては置かない、早く眼科醫に罹つて治療するであらうが、此病氣の初期には極めて輕く、押怺えやうとすれば隨分怺えられるのである。旣に素人が自分は眼病であると云ふて氣の付く時にはもう黑球を非常に侵害して居る時とか、或は餘程病勢が進んでから漸く氣が付くやうな譯であるので、吾々の處に來る人に就て調べて見ても直ぐ分るのであるが、其來た人一人かと思ふと決してさうで無い、其人の家族を能く調べて見ると家族全體に行渡つて居る、其内一番比較的病の重い人が診て貰ひに來たと云ふに過ない。さう云ふやうな譯で其初は極く柔かに來て、ネシ／＼と勢を逞しうして來るのである。多くは上眼瞼が異狀を覺えるのは、何か斯う眼に砂でも這入つたか芥でも這入つたかと思ふやうにゴロ／＼する、さうして朝起きた時には眼頭の所に眵が少し溜つて居る、けれども洗顏をすると心持がハッキリすると云ふやうな風である。夫であるから能く私の處に來る患者抔は私は一體眼性は惡いけれども眼病は煩つたことが無い、が此頃若くは汽船旅行をした時に油煙が眼に這入つたが爲に惡くなつたとか、或は花見時分に花見に行つて塵埃が眼に這入つたが爲に惡くなつたとか言ふて來る。それから其眼を開いて見ると決して其人の言ふやうに油煙や塵埃が這入つて惡くなつた譯では無い、眼瞼の裏に粟粒が無數出來て居る容體から見ても分る話だが、旣に半年乃至一年以上此病氣を煩つて居たものであると云ふ話をして聞かせると、成程さうかも知れませぬ、夜更かしをすると眼が眩んだとか云ふやうな事を患者が言ふのである。さう云ふやうな譯で自分が此恐ろしいトラホームと云ふ病に罹つて居りながらソレを知らずに經過する、隨つて知らざる中に此病氣が社會に擴がると云ふ次第である。近來學校では校醫が月に一度とか二度とか檢査をして病氣の重らぬ内に父兄に注意を與へる爲に、此病氣を餘り擴げずに濟むと云ふ實に結

構なことになつた。又徵兵檢査の時抔も、此トラホームの爲に不合格となる者がある、其爲自分もトラホームに罹つて居ると云ふことを知り、又其父兄は勿論のこと、或は近隣の者もアノ强壯な人が何處が惡くて不合格になつたのだらう、イヤ眼病のトラホームで不合格と云ふやうな譯から、トラホームの恐るべきとを知つて來るやうになつたのである。ソレが大に警戒を加へる助となつて居るが、まだ〳〵油斷をして居る者の方が實際多數であると思ふ。

既に言ふた如く初めの半年とか一年とか云ふ間は眼瞼の裏に粟粒が出來て居るだけであるが、もう黑球を侵す時期になると何うしても二三年煩つた後であるが、其頃になると中々氣が付かぬどころでは無い、非常に痛むとか、或は非常に眊むとか、見えないとか言ふて醫者を訪ねなければならぬのである、併し多數患者の内には自分の境遇上治療を盡すことが出來ず、性も分らぬ目藥抔を點眼して怺えて居ると云ふやうな者もある。さう云ふ者は段々病勢が進行して、黑球にマルて薄紙を貼つたやうに眼が白くなる、そして其時は眼瞼の裏は卽ち瘢痕と云ふヒッツリを起すから、丁度火傷をすると皮が引きつれるがアヽ云ふ風になる。又睫毛が下に向いて黑球を突ッつく、それが爲めに睫毛は一本も無いことになつて、マルて毛拔の鷄を見るやうな風になつて來る。それに内から出る眵の爲めに眼の周りは糜爛して赤くなる。さうなると全く人相が一變して來る。外を歩くにも眼の上を手て覆ふて歩くとか、或は何時も家の中に計り引込で居るので鬱悒狀態を呈して來る、隨つて常に下らぬ物事を考へ込み、又全身の運動不足の爲めに營養不良に陷つて、活動勇氣と云ふものは全く銷沈する有樣になつて來る。此時に至つては如何な美人も秋風落日の姿で、全く社會の廢物となつて此世を果敢なみつゝ一生を畢らねばならぬ。それでも無論生命は有るのであるが、碌々何の爲す事も無く廢人同樣になつて生存して居る次第てあるから、若し斯う云ふ患者が我が同胞の中に澤山

出來た時に於ては、勢ひ國家の經濟にも影響する道理だ。

此の最も恐るべく、最も忌むべきトラホームは如何にして之を防避することが出來るか、其點に就て少しく陳べて見やう。

元來トラホームは惡性で且つ永い慢性病であるので、養生や耐忍が續き切れぬと云ふ所から、今申した如き不幸の悲境に沈淪するのだが、併し個人衞生と共に公衆衞生が進歩發達したならば慥に之を防止することが出來る。現に今より百年前佛蘭西の奈破崙一世埃及遠征の時、軍隊の歸國と共に此病毒が歐洲大陸を蹂躙した。此時に大醫は勿論之が研究に熱中し、又政治家も國民も擧つて防禦法を講じた。それが爲めに病勢頓に衰へて殆ど其跡を絕つと云ふ位迄に至つた。さう云ふやうに國民の注意、衞生の力を以て之を防ぎ止められると云ふことは歷史上證明が出來る。

此傳染病毒は前申したやうに黴菌である。其黴菌が例へば風呂に混浴をするとか、不潔な水で顏を潔ふとか、或は患者と同衾するとか、或は患者の使用せし手拭を共用するとか、斯う云ふやうな所から侵入して、甲乙丙丁と段々に襲はれるのである。又學校抔に於ては兒童の遊戲の際に傳染するから努めて此傳播する所の媒介物の始末を注意せねばならぬ。斯る點に注目すれば容易に撲滅せしむることが出來るのである。既に此病氣に罹つた者は治療の出來る者は充分に治療し、又一旦此病毒に侵された以上は仕方がないから之を家族や他人に傳播させてはならぬと云ふ頭を持つて、其眼から出た汾泌物や眼に使つた手拭抔を注意するやうにするのが肝要だ。

風呂場の混浴は日本の習慣上已むを得ぬとは云ふものゝ、貴要なる五官器を備へて居る所の顏面を不潔な水で洗はぬやうにするとか、又或は風の吹く日散歩でもしたら努めて其塵埃を避けることに心掛けて、淸水或は沸し冷しの湯茶を以て眼を洗ふとか顏を洗ふとか、斯う云ふやうな注意を拂はにやなら

ぬ。因に本院では十數年前から極簡便な硝子製の洗眼瓶を拵へて病人の眼を洗はせて居る。健康な人と雖も塵埃に遭遇した時には豫防上それで眼を洗つて差支ない、否な洗眼することが必要だ。此洗眼瓶は坊間の硝子屋、醫療器械店、藥舖には大抵あらうと思ふ、一個僅かに三錢位で得られるのであるから、旅行でもする人は假令眼病で無くとも携帶したが宜しい。それから小兒は皮膚が薄弱で斯う云ふ傳染病に侵され易いから、其父兄は能く注意してやらねばならぬ。手拭抔も縱令親子兄弟の間柄と雖も別々にするとか、或は又全身に使ふ所の物は顏面の如き貴要な部分には使はぬやうにして、別に備へて置くやうに注意を要す。

動もすれば穢い手で面を撫でたり眼を撫でたり仕易いものであるが、手はいろ／＼な物に觸れて病毒を媒介し易いから、努めて常に洗淨する事に注意しなければならぬ。殊に子供の內には指を鼻の中に入れたり、口の中に入れたり、或は眼を擦るとか云ふ習慣があるが、父兄は能く注意して其惡習慣を改めさせる樣にするのが肝要である。それから田舍の宿屋料理屋抔に行くと便所の手洗水の側に不潔なる手拭が掛けてあつて、それで以て誰も彼も手を拭く。手を洗ふのは至極結構だけれども、其洗つた手を直と穢い共同用の手拭で拭くのは危險な話。尤も始めから手を洗はぬ方が宜い位なものである。中には隨分淸潔にした手拭を備付けて置く家もあるが、どッちかと言へば不潔の方が多い。一個人の家も矢張りさうである。又近來は汽車抔も洗面所は注意が屆いて居るやうだけれども、矢張り共同用の手拭抔で拭ふのは危險だ。奇麗に白くなつて居ても黴菌は到底肉眼では見えぬ。先づ共同用の物には手を觸る可らず、危險なものであると云ふ觀念を常に懷いて居つた方が宜しい。

それから前掛、之を毎日洗濯でもして使用するならば害は少いかも知れぬが、一週間も二週間も垢の着いた前掛を掛けて、其前掛が手を拭く用にもなれ

ば、口の側又眼の周り杯もそれを以て拭くとか、兎も角も前掛が手拭にも顔拭きにも眼拭きにもなると云ふやうな譯であるが、是は誠に宜くない習慣である。日本の着物の仕立方が不完全で、どうしても前の方が開く所から前掛を掛けると云ふことも必要であるかは知らんが、手拭の代りや顔拭きの代りに前掛を掛けるので無いと云ふことを一つ考へて貰ひたい。又襦袢の袖の先を少し出して、子供の眼から出た眵を拭いてやるとか、或は口の周りを拭いたりするのを能く見掛けるが是等も大變悪い習慣で改むる必要がある。

◉少年と花柳病

此篇はヨヒンヒンにて著名なる醫學士大野豐太氏の談片なり

▲花柳病の社會を荼毒するの激深なるは今更に云ふ迄もないが更に之を東京醫科病院の外來患者のうち婦人病者百人のうち八十人は痳毒性より來る子宮内膜炎である、殊に女學生の其多き部分も又これの患者で今のところ其統計は正確に示すことは出來ぬが、曾て伯林大學で學生の尿を試驗したら約八割の有毒者を發見したと云ふ我國の女學生も之に勝るとも決して劣るやうなことはないと信じられる、

▲然しながら同じ梅毒を患ふる者にあつても成年以上の男女は自業自得のことで早く云へば豬喰つた報いにしか過ぎぬのである、之に反して男女の道などは勿論のこと未だ十分には是非善悪の分別さへない幼少な男女が此病毒に襲れて見るから慘しい姿となり或は之がために一生の廢人不具となり或は之がために將來の不姙症を來たし遂に人生の快樂を奪ひ去るの境遇に陷る者その多數なるに至つては社會のため人道のため實に此上の災害はないのである、

▲未成年者ことに幼少なる男女兒童に花柳病患者あるは其多くは父母の不品行より來た所謂遺傳梅毒であるが痳疾も之に比較して決して少い數ではない、晩近二三年以前までは兒童の痳疾は統計報告す

るほど數に達してゐると云ふたが現時では其增加率が非常に進んで東京などでは梅毒よりも痳毒の方が多いのである、就中この患者は中流以上の子弟に限られてゐる、

▲私は現に醫科大學の助手を勤めてゐるので常に見童の患者を取扱つてゐるが其數多き中から此處に一つの例證を擧げて奈何に病毒の恐るべき中流家庭の腐敗せるかを說明して見やう、

▲姓名は醫師の德義として姑らく秘すが或日大學病院へ外來患者として堂々たる某紳士の夫人が三歲になる男子を連て療治を乞ひに來た診察して見ると立派な痳病で尿口から膿は出る顯微鏡的試驗をすると痳菌が無數にゐる痳病なるとは疑ふべからざる事實である、

▲三歲の兒童、何處から痳毒を感染したか是に就て其母御たる夫人に訊ねたすると夫人の云はく良人は健全の思想を持てゐる紳士ゆゑに斯る不德破廉恥の病毒に接すべき醜行のあらうとは思はれない妾も又その通り决して斯る忌しき病氣に侵された覺はない察するに此子の病氣は冷から起つたのでせう、

▲諸君、痳病は冷から起ると、天下これより以上の好遁辭があるであらうか辯は以て非を飾るに足る、女口賢くして牛を售り損ふと云ふが醫學の進歩した今日に於て、然も醫師の面前に於て此遁辭を口にす、自己の不德を隱さんために是を云ふ夫人の心中を察すれば多少氣の毒の感はするが去とては馬鹿氣た一言である、

▲それから私はその夫人に對て痳病の冷から起らざる理由を說明し此兒童の病毒は必ず父母兩人のうち何れか、然らざれば兄弟然らざれば召使ひの者から傳染したに相違ない、

▲若し此お子さんが七ツか八ツ位の女子で然も錢湯へでも往くのならば湯槽のマタギで他の浴客の病毒を受ける事もあるが、勿論一人では湯には這入れぬ三歲の兒童、殊に湯は內風呂にばかり這入る者が此有樣になつたのは云ふ迄もなく家內に其患者があつ

て此兒に傳染させたに違ひないと說明してやつた、是は兩親のうち必ず其一方が侵れてゐたに違ひないのである、

▲さて其子は入院した、私が專ら主治してゐたが何にしろ幼兒の痳病は甚だ療治し惡いもので尿道は狹いので十分に洗滌することも出來ずそれかあらぬか遂に直傷痳と化し手術を用ゐ半年の長きのち漸く全快した、

▲此の如き類例、殊に幼年の男女が是が爲に不具癈人になつた例證は頗る多い双指を幾度攑るも數へきれぬほどである、父兄たる者須らく猛省して可なりである、

▲然しながら諸君、私が諸君に報導すべきことは如上の問題ではなく、更に更に驚くべき恐るべき悲むべき少年の花柳病である、果して然らば其驚くべき悲むべき問題は何か、曰く破倫汚俗なる鷄姦の結果より來る病毒であると延いて其實を縷々述べられたり(下略)

質疑欄



●●●質問注意　質問中診察せざれば應答し難きものは一切解答せず又解答に遲速あるは取調べの都合ある爲めと御承知を乞ふ●質問は端書にても封書にてもよろしけれど單に質問のみをわかりやすく認むる事●質問に姓名を出すことを好まざる方は匿名にても差支なきも事務所へは姓名御報知の事●本號の雜誌に登載する分は凡て前月十五日迄に申込まれしものとす●總て急ぎの分は回答せず

質問者　熊本一婦人

問一、婦人月經のある間は三十三年間のものと聞き及び居候に本年五十一才にして閉止後三四年は經過せしに通常四五日間は充分にこれあるよしに付身體の健康にさしつかへなきものにや

問二、本年二十五才の婦人にして結婚後四年に相成候へども未だ姙娠せず時として運動少しはげしきときは下腹に痛みを覺ゆる事ありさるときは「ゆたんぽ」などにて溫むれば直に快方に赴き候此まゝにして打過ぎてよろしきものなるや御敎示を

乞ふ

一、答　仰せの通り婦人の月經のある期間は我國の婦人にありては凡そ十四五歲から始まりまして四十六七歲まで見ますのが通例としてありますそして四週間每即ち廿八日每に繰り返し來るものですが、中には多少遠いこともあり近いともあります御質問の御婦人は五十一歲で閉止なされたのはまづ通例と申してよろしいナぜなれば此五十一歲と申すのは多分數へ年でしやう滿年にて計算されましたなら丁度閉止の平均年齡に略ぼ相等することゝ思ひます御質問の要領は五十一才にて月經全く止み三四年閉止せしも此頃に至り每月四五日間づゝ充分にありとの事ですが醫師の眼から申しますと年老ひて一回月經が閉止りたるのち更に出血するやうのことあらば速に婦人科の診察を乞はねばならぬと申したい併し月經期間は三十二三年間と申さるゝのは是れは我國婦人の平均を取つたものですから其内には月經の平均以上長くある人もあり又平均以下にして早く閉止するもものあるのです其御婦人の月經期間及び前後の模樣はドーですかお腹が痛むとか眩暈耳鳴心悸等を發するとはありませんか少しも身體に異常なしとすれば左程御心配の事もありますまい併し是れが爲め身體に異狀がありましたら速に婦人醫の診察を受けられねばなりません

二、答　凡そ御婦人が結婚さるれば何れも身體健康なれば一兩年の內には妊娠されべきものです殊に本年二十五才の血氣時代なれば何れにも異常なしとすれば妊娠せぬと云ふことはない筈です然るに其御婦人は運動少しくはげしきときは下腹に痛みを覺ゆ云々是こそ不妊娠の一原因でしやう陰部に粘液あるは素より生理的ですが白色の不潔物を排泄するようなことはありませぬか是れは子宮內膜のただれにて婦人病として尤も多いので多くは男子の痳疾月經時の不攝生から起るので重きものは局部洗滌位では迚もなほりません婦人科醫の診察を受けられたし多分子宮內膜炎から來た不妊娠症ではなからうかと思ひ

ます

質問者　牛込　一會員

問　本年十才になり候男兒學校友達にトラホームに罹り居り候もの有之候に付注意は致し居り候處遂に感染いたし一ヶ月半ばかり治療を受け全治いたし候處此頃又少しく兆しあり點藥いたし居り候身體は先年肋膜炎を起したる程のものにて虚弱に候間本年は海水浴に參らせ度如何のものに候や御教示願上候

答　虚弱なるものには海邊に轉地保養せらるゝことは尤も健康上必要のことにて至極結構のことでありますが併しトラホームに罹り居る場合には海水浴は不適當と云はねばなりませぬ平素眼病に罹り居らざるものとても海水浴をなし夫れよりトラホームなどに罹るもの多しこれは前より感染して居りしものが海水浴にて刺戟された爲め早く發したもので海水浴はトラホームの試驗と云ふて差支へないのですサレバ先づトラホームを充分治癒せしめて往かれたし成可は御出でになる前に醫師に御相談なさるがよろし

質問者　山形　一會員

問　喘息病は如何なる事が原因となり起るものなるか又傳染病なるや御示教下され度候

答　喘息の原因には種々ありまして純性のものは其人の性質が氣候の刺戟などによりて發作するものもあり又は一種の臭氣香氣など吸ひ入るゝより起ることもあり此外鼻腔内に加答兒又腫物あるとき又は咽頭の加答兒等より反射的に來るのもあります又他の病氣例へば氣管子加答兒、腎臟病、心臟病、慢性胃病、其外非常に精神を興奮したる時などに起こすものとの二種あります

されば喘息患者は良醫に就き其原因となるべき胃病、心臟病なきかを確かめ鼻、咽頭腔の檢査を行ひ氣溫の變換刺戟性飲食物を避け發作時には成るべく新鮮の空氣を吸入せらるゝ樣注意し衣服を緩くし熱き飲料を供し手足には熱き局所浴をなしクロロホルムの蒸氣又は日本紙に硝酸加里の濃厚なる溶液中に

浸し一旦乾かしたるものを燃燒し其燻烟を吸入し又は印度大麻を含める煙草を喫するか又は安知必林一、〇を頓服し發作の去るを待つをよしとす猥りに「モルヒネ」の注射をすることよろしからず其他ノイマキエル氏の喘息散の吸入もよろし俗人にては左の處方は持續しても危險なく又効能も確しかてすから藥劑の事は危險がありますから御答へしない筈てすが左に記しましやう

沃度加里	一、〇	以上一日三回食後二時間分服
臭素加里	二、〇	
苦味チンキ	二、〇	
單舍利別	八、〇	
蒸溜水	一〇〇、〇	

本病は別に傳染することは聞きません近著のミユンヘン醫學週報に掲げられたるドクトルゼンゲル氏の治法は最も簡易なるが幾分の効能あるべしとなり氏の說によれば喘息にて呼吸困難を來せる場合になさんとする深呼吸は既に非常に擴張し居る肺を惱まし益々其困難を增すものなれば患者は努めて徐かに且つ少しつゝ空氣を吸ひ倘呼氣を長くするをよしとす夫れには稍々聲高く數字の如きものを算へしめ同時に又患者の注意を他に移させ以て呼吸困難を少からしむべしされば發作の生せざる時にもよく之を練習するに於ては次第に發作の數を減じ遂には治癒するに至るべしといふ

問　此頃の蒸し暑き爲め小兒に「あせも」澤山にふへ困り入候何にか散布劑にても有之候へば御教示願上候　質問者　芝區の一會員

答　是れは嘗つて本誌に掲載したことが御座います左の處法より御ためしあれ

第一法

亞鉛華末	一五、〇
澱粉	一五、〇

第二法

ザリチル酸	一、〇

タルクム
亞鉛華末　各三〇、〇
澱粉

第三法
硼酸末　五、〇
澱粉
タルクム　各五〇、〇

右三法とも何れも混和して撒布用とす

質問者　神田　一會員

問　私は三十七歳ですが近來顏へ「そばかす」が出來て困ります未初期故好き療法御伺申上候

答　是れは皮膚科專門の良醫に就きて治療せらるゝことを望みます素人療法は兎角劇藥を使はねばなりませんから危險です十%の昇汞アルコールを綿に浸し之を局部に罨法を施すと四時位を經れば水泡となる此上に亞鉛華澱粉を散布して除去するもあり又は石炭酸十分に水一分とを混じたる流動石炭酸を一ツづゝの「そばかす」にぬりつけ自然に取る法もあります斯樣なわけですから一ツ間違ひますと顏中燒けどをして美くしき御顏も爲めに取り返しのならぬ醜婦となり終りますからソコで醫師に治療して御貰ひなさいましと申すのです尤も輕症なものなれば硼砂、及炭酸加俚謨各一、五グリスリン二〇、〇薔薇水八〇、〇の合劑を一日一回づゝ塗布せらるゝことと又よろしとす

質問者　岐阜　篠田しづ子

問　打傷又は火傷せしとき醫師の診察を受くるまでの手當は無之候也

答　打傷にもいろ〳〵ありて別に骨も折れざる輕症のものにありては患部を冷却し又は石炭酸を浸して繃絡すべし若し創傷をしたる場合には消毒藥を吸收せるガーセを創面に布くをよしとす而して又綿及油紙をあて出血の浸透し若くは空氣等の竄入せざる樣注意せらるべし萬一骨の折れし場合には其部に副へ木をなして(有合せの板にてよろし)繃帶すべし火傷に對する一般に醫師の用ゐるものは石灰水、亞

麻仁油等分にして貼布するにあれど疼痛とまらず又石灰水の代りに「コンニヤク」屑に走り石灰を貰ひ來り之に水を加へれば石灰水となる亞麻仁油の代りには胡麻の油女の毛髪油又は行燈の水油にてよろし何れも急場の間に合はざれば役を爲さず右の二法固より悪しきにあらざれども竹中學士の經驗によるに食鹽水を以て繃帶し置くときは疼痛もなく創面も良く治す火傷は之を四度に區別し

第一　皮膚の充血に止まるもの

第二　皮膚は水泡(水ぶくれ)を生ずるもの

第三　皮膚の崩壞を來すもの

第四　皮膚を炭化せしむるもの

第二の水泡は針を燒きて之を潰すことよし成るべく其皮を壞さゞるやうなすべし食鹽水の製法は極めて簡短にして左の如し

普通の食鹽　三分(半匁弱)

水　一合

質問者　小石川　一會員

問　私は先日來上野夫人の著されしふかしパン製法書に從ひ常食と致し居りますが胃腸殊に小兒のためには至極適當致しますがドウモ放屁が出るには閉口致します如何なる爲に候や又夫婦と六歳四歳の小兒にて米飯一升三合に代ゆるにメリケン粉二升を用ゐ居りますが養分は如何なる割合に候や又之に用ゐるパン種も今後は自から製し度存じますから其製法御教示被下度何卒御願ひ申上ます

答　上野夫人著書のふかしパン製法は近頃大分試みに作る方がありますが常食にされるには矢張り普通の麵麭の方味ひもよく厭の來ることが少いでしやう麵麭の製法は料理擔當者に問合せ何れ御答をすることゝして御預りに致します又放屁のことは消化に關する事と思ひますが是も尙調べての上にするとして玆には米飯と麵麭の分析を揭げて御參考に供しましやう此表により比例を取れば要する處の滋養分量を得られます

左に御覽下さい

	蛋白質	脂肪	含水炭素	不消化纖維	無機鹽	水
加賀米	六、五六	〇、四四	七二、三六	〇、四〇	〇、四〇	二〇、二四
米	三、〇〇	〇、〇四	三三、七三	〇、三三	〇、一六	六二、八五
小麥粉	一三、七四	一、四一	六九、〇三	一、〇四	〇、七二	一四、〇六
内國製パン	六、七二	〇、〇九	五三、一九	一、一三	〇、七四	三八、二四

米飯たき立のものは消化時間一時間にして大麥は二時間、冷パンは三時三十分とす

問　私事本年二月頃より子宮病に罹り今は全治致し候又十歳になり候男兒平素別に病氣も無く候へども稍々もすれば感冒に罹り候就ては避暑に參り候爲めには山、海何れを撰びて宜しく候哉御教示願上候

質問者　在青山　一會員

答　男兒御同道て御出でになるのですか御中越によれば御許様には子宮病後の事故海水浴は適當しませんか却ッて温泉の方よろしかるべし併し男兒の方平素さして虚弱と云ふ程にもなしとすれば却つて海邊の方宜しからん夫れも初めより屢々海浴を取ることをせず徐々と試むる様になされ假令海浴に慣れても一日朝夕二回位とす一夏季の間海水浴を取れるものは一年間感冒に罹ること少しとまで云ふ位ですから男兒の方には海邊がよかろうと思ひますされば愈々御同行とあれば御前様には海浴を爲さず海水温浴を取らるゝがよろしく海邊の空氣は「オゾン」に富み純粹なる上に水分の含量多きを以て皮膚を乾燥せしめず呼吸器の疾患などを治すには大効あるものなり

問　旅行用に備ふべき藥品御教示願上候

質問者　本郷　一會員

答　先づ感冒の用意にはアンチピリン〇、七乃至一グラム位と外にザルチルサン曹達一回一、〇グラムを用ゐること頭痛にも又アンチピリン〇、七を服用し嘔吐や胃痙攣には鹽酸コカイン一回〇、〇四を用意し臺灣などへ行くにはマラリヤ熱の豫防の爲め鹽酸キニーネ一、九〇瓦入數十粒を持つて往き一日一粒宛飲み又之に罹つたら六時間に二粒を飲まれよ氣つけ藥には寶丹、精心丹、ゼムなどよろしく其他繃帶ガーゼ絆創膏の用意は尤も必要なり若し又船中にて嘔

吐したなら鹽酸コカインにアンチピリン〇、五を配劑して服用すれば大抵は防げるが又乘船前に沃度加里〇、五グラムを用ゆれば効あるべし

問　　質問者　山口　一會員

私事牛乳は餘り嗜まざる方なるも滋養ありとて可成飲用致し候が往々腹痛して下痢いたし候如何なる故に候や又差支へなきものに候や

答

胃腸の惡しき御方が脂肪の多き牛乳を飲用されますと往々下痢することがあります斯の如き人は脂肪を分離した牛乳を用ゐられるがよい又牛乳を飲みて腹痛する譯はないのですサレバ其牛乳が何にか異物の混合しある爲めでありましやう通常の牛乳では腹痛を起さぬものであります





治療會本部敎場主事　安西こま子

鯵酢むし
南瓜青煮

▲中皿

鯵酢むし　は、鯵を背開きになすか又は三枚におろし、之を冷水にて洗ひ、程好く鹽を撒りかけて暫らくおきし後ち、水にて洗ひ、又一寸こ生酢の中へ浸しおきし後ち之を蒸籠に入れてむし、終りに手酢を打ち、一寸とむして取出すべし

南瓜青煮　は、青色の南瓜を撰び、たはしを以て擦りて水にて能く洗ひ、核を除き、竪に四つ割となしてサナゴを取り去り、七八分の角切となして鍋に入れ、之に南瓜を浸す程の水を加へ、尚ほ甘き加減になる程の砂糖と少量の鹽とを加へ、南瓜に美濃

紙を被せ、鍋蓋をなさずして火にかけ、形狀を損せぬやうに注意して煮汁の詰るまで煮ふくめ而して平皿の如き器に移し冷しおきて用ゆべし

▲茶筌茄子

小なる茄子を撰び、軸を少しく切捨て、茄子を俎板の上におき、竪に二分程の間隔を取りて庖刀目を入れ、水にて洗ひ、之を鐵鍋に入れ、之に極めて少量の水と砂糖と醬油とを甘辛き加減に加へ、火にかけ、落蓋をなして柔らかになるまで煮るべし

▲深皿

せん越瓜

花麩

かげん酢

せん越瓜は、越瓜を一寸二分程の長さに切り、皮をむき、之をせんに打ちて桶に入れ、薄鹽を撒り暫らくおきて水にて洗ひ、一寸と酢に浸しおきし後ち、程好く酢を搾りて皿に盛るべし

花麩は、微温湯の中へ投じ粗ぼ柔らかになりしとき、更に之を沸騰湯の中へ投じザットゆでゝ目笊にあげて湯を切り又之を一寸と鹽酢（生酢に少しく鹽を加へしもの）にて洗ひて皿に盛るべし而して客に出す際に加減酢をかくべし又かげん酢の製方は、白砂糖に少量の水を加へて一回煮立て冷めしとき之に其量だけの生酢と少量の醬油とを加へ甘酸き加減につくりしものなり

▲蒸し茄子

酢みそ

中茄子を撰び、皮を剝ぎ、竪に二ツ割になして水の中へ放ちおきて灰汁をぬき而して之を蒸籠に入れて柔らかにむし、好き程に皿に盛るべし

酢みそは、並味噌を能く擂りて少しく砂糖を加へ擂り交ぜ之に酢を加へてゆるめ、更に裏漉をなして用ゆべし

▲茶碗

吉野すゞき

花えび

割り枝豆

へぎ柚子

吉野すゞき　は、鱸を三枚におろし、適宜の切肉となし、淡鹽をあてゝ暫らくおきし後ち水にて洗ひ、目笊にあげ水を切り、乾きたる布巾にて拭ひ、板の上に並らべおき粉葛を毛篩に入れて右魚肉にふるひかけ、又魚肉を裏返して更に粉葛をふるひかけ手にて敲き、魚肉に能く粉葛をつけ而して之を沸騰湯の中へ投じ、ザットゆでゝ直ちに椀に盛るべし

花ゑび　は、小なる車海老又は芝海老を撰び頭を除き、水にて能く洗ひ、之を沸騰湯の中へ投じ、充分に火が通りしとき、手早く冷水の中へとり能く冷し、尾と尾に接せる處の皮壹枚を存して他の皮を除き、背開になして腹の方を内側として、輪形となし、尾先の處へ頭をはさみ而して椀に盛るべし

枝豆　は、枝より莢のまゝ切りとり、平たき笊の中へ薄く攤げ、鹽を撒りかけて暫らくおきし後ち之に水をかけ、之を沸騰湯の中へ投じ、色の變らぬやうに柔らかにゆでゝ目笊にあげおきし後ち莢より豆をはぢき出して豆を二ッにはがして椀に盛るべし

清汁　は、鰹節の煮出汁に鹽と極少量の醬油とを加へしものなり

▲冷しもの

賽形あわび
金てん
かつら越瓜
軸生姜

賽形あわび　は、鮑の肉に鹽を塗し指先にて擦りつけ、肉が固くしまりたるときは殼と肉の間に卸金の柄をさしこみ、少しく力を入れて突けば腸は殼に殘り、肉は剝れるなり之を冷水にて洗ひ、耳を切り捨て賽形に庖丁をなすべし

金てん　は、寒天一本につき水二合乃至二合五勺の割となし、先づ鍋に水を入れ火にかけ之を暫らく水に浸しおきし寒天を斷り入れ、寒天が溶けしとき、少しく甘き加減に白砂糖を加へ、砂糖が溶けるを待ちて篩にて漉し、再び鍋に戻し入れ、火にかけて少しく煮詰め、別に梔子の肉を指先にて壓しつぶして微温湯を加へて色を出し、之を布にて漉して前

の寒天汁の中へ混じて金色に着飾し直ちに流し箱へ流し込み冷へかたまりたるとき之を色紙形或は霰形に庖丁をなすべし

かつら越瓜　は、一寸程の長さに切りて皮をむき捨て之をぐるぐると薄くむき、巻紙の如く巻きて木口より薄く打ちて之を冷水の中へ放ちおきし後ち用ゆべし

軸生姜　は、生姜の軸を八分程の長さとなし、皮をむき而して竪に薄くへぎて用ゆべし

右冷し物を盛る器は錫製の深鉢又は無地の深鉢を用ひ、淡鹽水をはり、氷を加へて出すべし

寄書

掃除の方法

醫學士　竹中成憲君

前世紀の終に近き二十年に於て肺病は日本に著しき増加をなせり其原因は武藝時代に比して人民一般に體力減衰せると交通機關の發達に因り體力減ぜると共に病毒を散亂せるに因るべしと雖予は他に一大原因として室内に土足出入の洋風を思はざるべからずと信ず西風輸入してより西洋造起り之に出入する者は洋服と和服とを問はず靴を用ゆ西洋に在ては此風の古きがゆへに人々之に對する清潔法を心得居り土足とはいひながら頗る清潔なり彼等が家に到らば美麗なる敷物のために靴のまゝ昇堂するを憚る事あるは洋行者の心肝に銘ずる所なるべし退て吾人の所謂西洋造を見るに多くは不潔千萬にして外國人に對しては赤面の至りなり

是れ土足昇堂の風に慣れず昇堂に際し靴を掃除するの術を知らざるに因ると云はざるべからず吾人は又肺病の恐るべき事を識らず患者一回の痰中には幾億萬の黴菌（肺病原因蟲）のあるを思はず街路屋内の土間は勿論風呂屋の板の間に到る迄痰を吐く有樣なるゆへに吾人の靴の裏には無數の肺病毒附着しある

ものと思はざるべからず西洋にても此頃洋婦の街路を引き摺る的長き婦人服を禁ずるの議ある程にして土足の恐るべきは明かなり

先年の萬朝報紙上に左の事あり專門雜誌所載にあらざるを以て是れを以て直に適當なる引證となすは穩當ならざれども參考に資するの價値なきにあらず

婦人服の裾と黴菌の數　英國の一雜誌は古き紙幣中には驚くべき多くの黴菌を含み居れるが婦人服の裾には更に多くの黴菌を含み居り或る人の檢したる所に據れば裾の絆帶の一片に二萬六千八百個の黴菌を含み居り又幅六吋長さ五倍なる裾の二片には千〇六十七萬二千個の黴菌を含み居たりと而して婦人が裾を地に引摺る際裾に附着せずして地上に亂れ動き人の呼吸するもの若しくは裾に附着して家に歸りたる後振ひ落さるゝ黴菌は數限りも無きことなりと云ふ

獨逸の結核專門學者コルネット氏は空氣中の結核菌を檢せむと欲し菌重力の規則に據り下方に沈澱すべきを考へ床板上の塵埃を檢査して果して結核菌を得たり尚ほ其生活力の有無を檢さむとして該菌を動物（メール、シュワイン）の腹膜下に注射し其動物に結核病の新生するを見て生活せる有力なる結核菌の塵中に在るを確めたり尤も西洋に在ては街路の塵埃中本菌を發見せる實例は今日迄は比較的少かりき之に反して肺病者の室は肺病黴菌を以て充たされあるもと想像せざるべからざるが故に塵の上ですら濕りたる布片を以て拭ふを良とし普通の如く箒にて掃くは危險也若し掃く時は其後二時間以上其室に入るべからず

何となれば其室内の塵は凡二時間を經るにあらざれば床板上に沈澱せざるものなればなり故に掃除に就ては十分の注意をなさゞれば黴菌吸入の結果既に肺病あるものに更に同一患者の肺の他の健康部に新なる肺病を起さしむる洵に恐るべき事ならずや退て土足昇堂許可の我所謂西洋造に於ける床板の掃除の樣を見るに普通疊の上を掃くと少しも異らず塵風雲を

なし咫尺を辨ぜざるものなり是豈官吏會社員等に肺病多きの理由にあらずや試に掃除時間以外に於て彼等公務中に於て彼等の室に在て太陽光線の射入するの所を見よ細塵雲煙をなして霧の如し此細塵を衛生學上（太陽塵）獨逸語（ソンネン、スタウブ）と云ふ實に此塵は靴よりも來るものにして肺疾は勿論他の疾病（例て化膿）の原因と爲る所の小有機體（黴菌）を含有す此室内に於て日々八時間の勤務を爲すもの而して其身體は神經衰弱的の骨川痩吉的なるもの如何にして此病毒に打勝を得む學友東京府技師遠山椿吉君は前年より如何に結核菌が人跡到る所に瀰蔓せるかを證せむと欲し學校停車場公廨官舍等に於て塵埃を採取し之が中に菌の有無を檢せる事一百十四回而して此の中菌を發見せる事十回なりき先年岡田博士も同樣なる試驗を爲せり豈寒心せざるを得むや鐵道には此頃「列車給仕」なるものを設き乘客の用を辨ずるの外車室内の掃除を爲さしむ甚だ可なりといへども其掃くや塵埃雲を爲し給仕自身は勿論（給仕は呼吸器を用ゆべし）乘客をして無數の黴菌を吸入せしむ客にして辨當にても用ゆるあらむ乎黴菌を喰はざるべからず此塵埃を作る所以のものは我國人の靴を使用するに當ても之を拭ふの道を知らざると列車には下駄の儘入るを許しあると一般公德觀念の缺乏との三事に歸因す列車内は街路（我國の）と異ならざるなり故に我國列車は外國の者と日を同して論ずべからず

併吾人は此塵埃を防ぐの方法を講ぜざるべからず而して其方法たるや甚だ簡單なるものなり即ち「濕潤法」を採れば足る予の奬勵する法は鋸屑（青森「のこくず」越後ふきのか「ひきぬかの訛」東京「おかくず」）に十分水を含ましめ之を床板上に散布して後掃く也此の法は敢て予の發案にあらず西洋にては夙に之を用ゐ我國にても食鹽又は茶滓を疊の上に散布して而して後掃く事あり同一の考案なり予曾て青森能代間鐵道開通式に臨み能代の材木會社を參觀し當時同社に於て 鋸屑 を空しく放棄するを見て之が利用

の途を考へ之に消毒藥を含有せしめて便所に臭氣止として用ふるの考あるに先ち之を上記掃除用に供せんとす願くは官衙會社學校列車等一般之を此の用に充てむ事予の深く望む所なり　鋸屑は到る處にあり夏期に在ては氷屋の濕りて用を爲さゞるものを用ゆるも亦可なり又此の頃左の事を新聞紙上に見たり果して實用となるや否や

塵の立つを防ぐ油　此頃墺太利に塵留藥とも稱すべき一種の液劑を發明したる者あり一見棉花油に異らざる油なるが維納にての實驗に依るに此の油を年に二回床の上に散布すれば一週間一度位の掃除にて十分にして而かも掃除の間少くも塵の立つことなく極めて清潔に室内を保ち得る由にして既に旅館劇場闘牛館等の如き多數群衆の雜踏する所に用ゐて奇効を奏したりと云ふ

予の法は即日より何人も之を實行する事を得て價亦極めて廉なり



●我國の盲啞

▲統計學者河合利安氏の最近調査によれば我邦には未だ國勢調査の實行を見ざるが故に不具者の數が幾許の多きに達すべきや之を知悉するの由なしと云へども幸ひに文部省に於ける學齡兒童就學の監督上盲啞丈の調査あるを以て姑く第二の國民たる學齡兒童人中盲啞の比例を擧げられしが其統計によれば近來盲啞共に兎角增進の傾きなきにあらずといふ其表によれば盲にありては香川、新潟、福岡、山形、啞にありては宮崎、鹿兒島、宮城、埼玉、三重等分外に多きを占め殊に山形の盲は逐年增加の傾向あるものゝ如し是等比例の增減は前述の如く其調査不完全なるが上に其原因種々の天然的並社會的要素より來る

ものなれば此數字を以て直に如何の斷案を下すこと能はざるは勿論なるも兎に角其比例の多きを示す地方が爲し得る限り是等不具者の減少に勉むべきは社會殊に衞生家、經世家等の本分とする所なるべし盲の原因は生來、病氣、遭難、老衰等より來り病氣としては內障眼、內外眼災、天然痘、腦病又は神經衰弱最多く啞の原因は血族結婚より生ずるもの多く生後には天然痘、痲疹、猩紅熱等の如き傳染病及聽官を害する如き遭難最多くの原因となり幼年にして聽官を害したる者は談話力を半若くは全く失ふと云ひ又貧困は啞聾を產する原因なりとの說もあれば前揭の各地方に就き能く其原因を質し之が減少を計らんこと經世の急務なるべし但此原因を探究せんには府縣等の大區分にては到底其眞相を詳にすべからず宜しく町村、大字尙ほ組合等に迄立入て其實を擧げんことを要す

▲小兒と胃腸病　小兒の胃腸の多くは過食は勿論砂糖製の菓子を喰ひ過ぐるより起るもの十中八九を占むる有樣にて此種の菓子は胃に入りて乳酸を生じ消化器を害するに至るものなれば可成ビスケットやパンなど與ふる方滋養もあれば是より夏季に向ひ適當のものなり記す迄もなく果實の不熟靑梅靑葡萄などは尤も腸胃を害し取り返しの付かぬことあればよく／＼注意せられたし

▲撒水上の利益　埃風は夏に向ふに從ひいよ／＼盛となるべきが此塵埃中には結核やトラホームなどの黴菌が含まれて居るのであるから西洋と違ひ道路に石を敷んである譯でないから撒水より外道はない撒水は極めてよい事ではあるが滯の水不腐水など撒くは却て危險千万なことである併し此撒水に就て尤も便利なるはさし鹽のある東京などでは大川筋の如き海水を撒水するときは鹽分、沃度を含んで居るから殺菌力が存するばかりでなく永く濕りを保ちて乾燥することが遲いから手數も省け衞生上非常に効能あるものなり

▲大道の齒磨水　近來大道の露店などで大に僥山な

る効能を述べ立て歯磨水を賣る者あり是は重もに稀鹽酸の水溶液なれば歯は脊脆になるも爲めに琺瑯質を消耗するに至り遂には疼痛を起して些細のことより難症を起すことあれば注意すべきことなり尤も稀鹽酸は一二滴を一杯のコップに盛れる清水中に入れ夏季の飲料に供することあれど元來劇藥なれば分量を過ぐれば歯の害のみならず又人を殺するに至らん

▲精神病患者の統計　東京府巣鴨病院に於ける明治十九年より同三十六年に至る十八年間の統計を見るに白癡（男五十一人女二十七人）、躁鬱狂鬱狂（男三〇九人女一六三人）、躁鬱狂躁狂（男一、一〇三人女五四二）、早發癡狂（男八一九人女三七六人）、臓躁狂（男五、女三三人）、癲癇狂（男六七女一七）、中酒狂及中毒症（男八四女四）、痲痺狂（男二九五女五二二）老耄狂（男六八女六六）其他（男五二女九）、合計男三、二八七人女一、五九七人、總計四、八八四人にして男女とも躁鬱狂躁狂、及痲痺狂、早發癡狂尤も多しと

又明治十二年七月より三十六年十二月に至る二十四年六ヶ月間東京巣鴨病院に於ける退院患者成果の百分比例によれば左の如しといふ

全治　男、二十二人　女　二十三人　　輕快　男　二十九人　女　三十人
未治　男　二十七人
退院　女　二十五人　　死亡　男　二十二人　女　二十三人

▲旅館に於ける注意　大分世間の注意を引き起すに至りたるが旅人も可成注意して此等の旅館の公德衛生の進む迄は布片を携帶して夜着の襟を覆ふべし其最も佳なるは呼吸子（レスピラートル）を以て口鼻を覆ふて就寢することと尤も安全なり

▲大家の報告　第二回日本聯合醫學會總會の節醫學博士三浦謹之助氏は鍼治法に就き左の如く論ぜられしといふ

●鍼治法に就て

前略、予は微少なる鍼を促へて針小棒大の言をなすべしとの譏誚を先驅とし其歷史解剖及生理を論じ治療の應用に就ては假令試驗を經たりと雖もまだ之れ

が斷案を下すに至らずと結論せられたりといふ（神經學雜誌）

▲巴里及伯林の衞生的觀察　國家醫學會雜誌第二三〇號佐々木氏の報告は左の如しと

諸種の統計に據るに、巴里に於ける成年男子一千人中既婚者の場合は七一二・人に當り、成年女子に於ては四三・四人に當る。伯林に於ては既婚數稍や多數にして男子八五人、女子四八、五人を算せり。然るに婚者にして妊娠せざる者の數は巴里に於ては著しき多數に達し、婚者一千人に就き四六・五人の割合なり、伯林に於ては僅に二六・四人を算するに過ぎず。

次に正式出産屆數（一千人に就き）巴里に於ては一五・九伯林は二二人を算す。故に成熟女子一千人に對する割合は巴里は九八、伯林は一四六・二なり。死亡數は人口一千人に就き、巴里二三人、伯林一七・八人を算し、殊に傳染病に因る死亡數を比較すれば次の如し

人口一萬人中、

	巴里に於ては	伯林に於ては
腸チフス	六一二人	八〇人
天然痘	一七六	〇・六
産褥熱	一四三	一〇五
結核	一一四四〇	四二一七

之の如き巴里及伯林の相違は蓋し主として家庭的關係に因するならんと云ふ

▲現在の博士總數　最近の調査によれば（五月末）法學七十四人、醫學百二十五人藥學八人工學百十四人文學六十三人理學六十三人農學十七人林學七人獸醫學十一人なりといふ

▲福岡醫科大學教授　去五月二十一日獨逸より歸朝せし櫻井恒次郎氏は留學中も本會へ雜誌等も送られ先きには本會の爲め執筆の勞を取られしが今回福岡醫科大學教授に任ぜられ同時に解剖學第二講座擔任命ぜられたり

▲獨逸に於ける結婚年齡　男子の百分の四十四は二十五歳乃至三十歳の間にありて女子の百分の五十六

は二十五歳なりといふ

▲脚氣に適する食物　脚氣專門の坂口氏の説に他食することは脚氣發病の原因にして勞働者に該患者多きも之れが爲なり相州三浦邊の漁夫に多きも皆然り彼等は一旦船に乘れば假令ひ空腹になるも船頭よりの命令なきゆゑ食ふことを得ず故に常に食ひ溜きをする風があるから年々多數の患者を出すに至るなりと白米を喰べるなら可成古米を選ぶべし古米を得られなければ白米を充分能く磨ぎぬいて夫れを柔らかめに炊くように尙麥飯や小豆は大によろし野菜類は大抵の品は宜し果實類も適宜に食すれば便通をよくする効がある便通の惡しきは脚氣患者の禁物なり云々

▲飲料水の注意　陰晴不定の折柄とて間歇熱、脚氣、惡性水腫、肺結核、腸加答兒等を惹き起すもの尠からざるが是に就て最も注意すべきは飲料水にて元來人體の組織中百分の六十四は水より成り例へば十五貫の人ならば九貫六百目は水分なる譯なり而して一人が二十四時間に排出する水量は二十乃至三十瓦（一升乃至一升五合）の多量に上り隨て日々飲用する高も之に應ぜざるを得ず、されば飲料水の良否は直に人體の健康如何に影響する甚しく之を統計に就て見るも全國の平均死亡率は千人に二十人の割合なるも水質不良の地方は二十五人乃至二十七人の死亡率なりといへば時節柄殊更此點に留意し如何はしき井水又は汲溜の水など決して之に使用せざるやうすべく水道の水と雖も一旦煮沸して用うるを宜しとす

▲哺乳兒の脚氣　母親又は乳母に脚氣の症候あるときは斷乳せざるべからず哺乳兒の脚氣症候は略々左の如し早く良醫の診察を受くべし

一、哺乳兒の脚氣に罹りたる時は眼球の光線失せ顏色蒼白となり元氣なくして常にむづかり且つ安眠する事能はず二、幾度となく與へたる乳を吐き凡ての飲物咽せかへりて嚥下する能はず三、小便の通利惡しくなり且つ綠色の大便をなし次第に衰弱して泣聲細り上眼瞼腫れぼたくなりてパッチリ眼を開く能はず

▲脚氣病と馬鈴薯　馬鈴薯の滋養に富みて日用の食料品として缺く可らざるものなることは普く人の知

る所なるが多年脚氣病に對する諸種の研究をなして刀圭界に貢獻する所ありし博士ユーホエルマン氏は先頃說をなして馬鈴薯が有する植物的酸類は脚氣病毒を撲滅するに有効にして予の實驗上好成績を得たりと二十年間の統計までも揭げたり

▲三井家の慈善病院　日露戰爭に得たる利益金中より百万圓を割きて此度いよ〳〵相談一決の上慈善病院を寄附することゝし財團法人として既に其向へ屆出でをなせりといふ三井家が率先して斯る慈善事業に奉公したるは近來の一大美擧と云ふべし

▲爪の垢　危險なもの大人小兒と云はず度々注意して爪は屢々剪み取るを要す諸種の黴菌は之より傳播すること多し結核狼瘡輪癬トラホーム虞るべきもの頗る多し山根博士の常に云はるゝ如く食事前には必らず小兒に手指を洗わしむべしと言ふ事は易く行ふ事は難し勵行こそ緊要なれ

▲小兒のあせも　暑氣に向ふにつけ大人も小兒も汗線の分泌亢盛となり特に小兒の如きは何れもあせもに惱むもの多しこれには刺戟性の石鹼などを用ゐず澱粉か、石松子末又は枯礬末を撒布すれば自から治癒すべし

▲腋臭　一種の皮膚病にして容易に治癒せず夏季は臭氣殊に甚だし之はなまじ高價の藥を用ゐんよりは寧ろ其局部をよく〳〵洗滌したる後に明礬末を撒布し又は水揚散など塗布すること尤も簡短にて惡臭を防遏すべし

▲日射病　今年は日射病に罹りしもの多しと其徵候前驅症として全身倦怠疲勞を訴へ食思少くなり遂に劇烈なる頭痛の後轉々煩悶呻吟し眼は血走り皮膚は厥冷し發汗あり甚だしきは冷汗を流し舌は白苔となり乾燥し動悸は幽微となる然れども頸動脈は躍躍すといふ注意すべきなり

▲小兒とハンモック　小兒をハンモックに載せ午睡せしむるは大に考ふべきことにして其動搖は腦を痲痺せしめ一種の魔醉法に罹りたるものにて有害なりとの說外國にも大に行はれ民間の注意を惹き起せり

といふ

▲韓國大病院　佐藤醫學博士の手に計畫されつゝあり右は東京以西に於て東洋第一の完全なる病院を建設するにありといふ

▲盲啞の失官原因　東京盲啞學校に於て最近盲啞兩生の失官原因を調査したるに盲生側にては生來五、膿性結膜炎十一、遺傳黴毒七、痲疹五、角膜炎四、痳四、又啞生側にては生來八四、腦膜炎四二、打腦十五、色性腦膜炎十三、外耳炎九、痲疹五、神經過敗四、百日咳三人にして其他は一二名づゝの失官原因なる疾病五六ありたりと

▲京都市の傳染病患者　京都市内に於ける各種傳染病患者は氣候不順の爲め平年に比し增加の傾向あり本年一月以降七月十四日迄の患者數左の如し

腸窒扶斯	三百三十九名	實布的里亞	百六十六名
赤痢	五十二名	猩紅熱	十六名
合計	五百六十三名		

▲神奈川縣の赤痢　一昨日橫濱市内に三人の患者一時に發生し郡部も同病の發生少からざるより同縣衞生部に於ては豫防法につき講究中なり今日までの患者は橫濱市四十人、死四人、橘樹郡一人、三浦郡一人、鎌倉郡三人、高座郡十二人、死三人、中郡二人、死一人、足柄上郡五人、同下郡一人、死一人、愛甲郡二人合計六十七人なり

▲北海道壯丁とトラホーム　過日札幌聯隊區にて徵兵檢査を爲したる折トラホームの比例を取りしに甚しきは百人中四十九人五分四厘を算するを見たりといふ

▲馬尼剌の虎列剌　馬尼剌に於ては虎列剌病再び猖獗し七月六日迄の一週間に於て患者百四十四名死者百四十二名を出したる旨公電ありたり

▲又も百斯篤鼠　深川區黑江町二十三番地の稻荷社橫設置投鼠函投入に係る斃鼠を發見し檢鏡の結果いよいよ百斯篤鼠と決定せりといふ



大日本婦人衛生會記事

講師招待會略況

去月二十五日月曜日午後六時より麹町區富士見町富士見軒に於て昨年來本會の爲め講話せられし講師諸氏を招待して晩餐會を開き役員の多數も之に會して興を添へ鍋島會長の謝辭あり宴終る頃岡田博士の挨拶ありたり其大要に曰く衛生の事は自分等の職務に關係ある事で盡すべき任務である其任務に向て家庭には御繁忙の貴き時間を割きて衛生の爲め御盡力になることは却て是より御禮の言葉を申述べねばならぬのである然るに僅か微力を致したと云ふ事で御招待に預り恐縮の至り尚力の及ぶ限りは盡力致しましやうが尚諸氏にも此事業の爲め公共の爲め屈せず撓まず御盡力あらん事を祈る云々と述べられ岡田博士の發言により一同杯を擧げて鍋島會長の健康を祝し次で宴を徹し別席に於て懇談に時を移し散會せしが當日出席の諸氏は左の如し

講師（順次不同）醫學博士岡田和一郎　醫學博士栗本東明　醫學博士遠山椿吉　醫學博士佐藤達次郎　醫學博士木村徳衛　醫學博士岡田榮吉　堀内中佐　醫學士橋本左武郎　ドクトル富士川游　ドクトル新井吉房　醫學士寺川積尼　金澤田豐作　ドクトル菊地循一の諸氏なり

役員は鍋島會長　濱尾副會長　岡田雅子　高木かう子　岡田徳子　松平労子　穂積歌子　岸澄子　高橋孝子　土肥多穂子　羽田喜裕子　三宅ふじ子　宮本榮子　川村き代子　中濱よし子　石川さだ子　小川孝子　宮下咲子の諸氏なりき

●休會　八月及九月は炎暑の候に付本會の講話を休む

茨城支會報告

六月例會

六月廿四日水戸公園内弘道館に於て午後一時より例會を開きたり來會者約八十人當日岡吉胤翁古今集を講話し尚淺野斧山師の幸ひ來水ありしを請じて婦人に有益なる講話を演述せられたり因りて當日出席の猿田贊助員の衛生談は時間の都合により次回に廻すことゝなせりといふ



山形支會報告

六月例會

六月三十日午後一時は女子師範學校内に例會を開く岩本副會長を始め幹事會員諸氏來會割烹實習の後左の講話あつて四時頃散會せり

一妊娠時の併發病に就て　古閑醫學士

新刊寄送書批評

醫學士竹中武憲閲　作元造著

看護婦試驗答案書　一冊　正價二十五錢

發兌元　東京本鄕區龍岡町三十四　吐鳳堂書店

本書は著者が看護婦諸子に講習の際起稿したる者にて第一類には解剖、生理第二類には一般看護法治療介補雜病處置救急法傳染病看護法等東京府試驗問題七十二題の外三十餘題の必要問題を撰て一々答解したるものにして看護婦志願者には座右缺くべからざる良書なり



弔詞

●三井晴子遠逝　本會特別會員三井晴子の君には胃癌の爲め永々療養中の處去月二十八日午後二時遂に遠逝せられたり君は嘗て本會評議員の任を負はれ盡力せられしが今や其訃音に接し茲に痛惜の至に堪へず本會は

謹みて哀悼の意を表す

●葬儀は本月二日本所區中の鄕業平町眞盛寺に於て莊嚴なる儀式を以て營まれ本會の役員事務員等會葬せり

○本會入會者

○事務所申込

●新潟縣中蒲原郡龜田町　通常會員　清洲　富子

●北多摩郡大久保村字東大久保　通常會員　稻垣　すゞ子

●韓國京城南署笠井内四十統五十二　通常會員　朴　筆子

●深川區木場町十五　通常會員　井澤　ろく子

●山口縣大島郡久賀町　賛成員　嵜村　文市君

●牛込區赤城下町四十三　通常會員　鵜飼　よし子

○幹事岡田德子紹介

●京橋區北島町一ノ三十三　特別會員　岡田　三重子

○小石川齋藤竹子紹介

●牛込區矢來町四番地二十四號　通常會員　正木　いく子

○新潟支會入會者

○幹事中村しげ子紹介

●新潟市中大畑町乙部四十四號　通常會員　森山　きく子

○幹事佐柳ちよ子紹介

●新潟市上旭町一番丁　特別會員　野田　きよ子

●同市下旭町　通常會員　藤井　から子

○山形支會入會者

○北島講師紹介

●山形市　通常會員　館　つね子

○岩本副會長紹介

●山形市　特別會員　高木　孝子

●全　市　通常會員　佐々木やを子

○幹事林ちせ子紹介

●山形市　通常會員　牧野　すき子

○姓名變更

●通常會員田中いし子改め　平塚　いし子

轉居

▲會員諸姉御轉居の際は新舊御記入必ず事務所宛御一報相願候

●府下北豐島郡日暮里村字金杉へ　鹿島信子
●本所區元町二ノ四十三番地へ　秋原五百子
●神戸市楠町六ノ二二四番地へ　松方悠子
●下谷區東黒門町三十三番地へ　青木すゞ子
●麹町區飯田町三丁目二十番地へ　丹治作子
●函館慈惠院施療院へ　大木うん
●北海道札幌區大通四六ノ十へ　大澤すへ子
●高崎市下横町三へ　相良清子
●麻布區霞町十七へ　山川二榮子
●靜岡縣富士郡楠野村へ　藤原美代子
●麹町區平河町六ノ廿六へ　淡路かづ子
●小石川區竹早町百二十四へ　石栗とせ子
●越前國敦賀郡敦賀町津内へ　青武おい子
●水戸市下市白銀町へ　室伏きよ子
●豐多摩郡千駄ヶ谷字新川へ　佐野きみ子
●芝高輪南町五十九へ　仁禮壽賀子
●本郷區明町三へ　飯田和香子
●芝高輪南町四十七へ　大岡榮子
●牛込新小川町三ノ一へ　村上郁子
●日本橋區平松町十一へ　青木すゞ子
●内藤新宿多納病院内へ　山尼ふみ子
●牛込喜久井町十六へ　河村たま子
●神田區駿河臺袋町十五へ　三浦枝子
●德島市下助任村七三十六へ　三杉しげ子
●姫路市北條口八十八へ　田中直子
●大阪市外海老江村七十九へ　瀧川みち子
●伊豫國別子銅山住友病院へ　岩村玉子

●交換寄贈雜誌

●同好　神田區南甲賀町十二　同好倶樂部
●みづゑ　小石川區關口駒井町十三　春鳥會
●こども博覽會　神田區表神保町二　同文館
●圖書新報　牛込區內左內町十二　同社
●治療藥報　日本橋區通旅籠町十二　同社
●日本赤十字　京橋區築地二ノ二十一　同社
●日本婦人　宮下澁谷御料地內　帝國婦人協會
●新潟縣衛生會雜誌　縣廳內　同縣衛生會
●日本橋區衛生協會雜誌　日本橋區永久河岸　同會
●日本の家庭　神田表神保町二　同文館
●統計集誌　京橋山城町　東京統計協會
●東京藥事新報　京橋桶町　同社
●東京市教育會雜誌　東京市役所內　同會
●東京小間物化粧品商報　日本橋馬喰町　同會
●女學雜誌　大阪東區久寶寺町　明治女學會
●なでしこ　大阪下二番町通一　同社
●大坂婦女新聞　熊本市江戸堀南通一　大日本婦女學會
●家庭の友　神戸市內坪井町十　同社
●家庭生知　熊本市西片町一　同社
●衛生新報　神戸市相生町一ノ二十七　內外出版協會
●越佐教育雜誌　新潟市東仲通二番町ノ二三七　私立神戸市衛生會
●衛生談話　神田區駿河臺北甲賀町十七　越佐教育會
●英語生　麴町區飯田町ノ二十一　通信社
●衛生新報　下谷區池の端仲町　東京衛生新報社
●獎學報　物町區飯田町　同發行所
●產婆人　日本橋區濱町　同會
●學士科學雜誌　大阪心齋橋筋　同社
●產婦人科新誌　日本橋區通一丁目　日本產科婦人科協會
●婆衛生新報　南玉一ツ橋通町　同社
●教育公報　神田一ツ橋通町　帝國教育會
●明治の家庭　牛込下戶山町　同社
●明治の教育　牛込納戶町　同社
●兒童研究雜誌　神田錦町　同社
●神經學雜誌　東京市麴町區　日本神經學會
●醫學專門雜誌　帝國醫科大學　同發行所
●ひとり　愛知縣名古屋　醫學研究會
●春育書　下谷區中御徒町　同社
●獸醫學雜誌　牛込下宮比町八　日本獸醫學會

●藥石新報　大阪市西區江戸堀南通四丁目　藥石新報社
●醫事時報　神田區錦町三丁目　醫事時報社
●衛濟新報　大阪市北區西扇町　同社
●婦人世界　京橋區彌左衛門町　實業之日本社
●婦女新聞　牛込區東五軒町　婦女新聞社
●婦人新報　本郷坂下町　同社
●婦人とこども　本郷女子高等師範學校內　フレーベル會
●婦人會月報　神田錦町三ノ二　同會
●兒童研究　小石川區　日本兒童學會
●家庭雜誌　麴町區元園町　同社
●家庭の樂　新潟縣女子師範學校內　同會
●家庭新誌　本郷區西片町十　同社
●大日本私立衛生會雜誌　京橋區南大村　大日本私立衛生會
●體育　府下大井村　日本體育會
●通俗衛生新報　大阪西區土佐堀通　同社
●本邦醫學新報　和歌山縣　同發行所
●國家醫學會雜誌　本郷區　國家醫學會
●工手の母　大阪四區新町通　同社
●交通交界　埼玉縣浦和町　同社



無菌牛乳







警視廳御認可

最新式蒸汽々罐装置
牛乳消毒器械設備

牧場は
府下北豐島郡巣鴨村千百八十六番地の廣濶なる丘上にあり

殺菌室及
販賣店は
東京市小石川區原町百卅三番地植物園裏

萩原本店

御報次第何時ても配乳いたします

速記應囑

事務所の特長は深切にして然も迅速なるにあり◎女流の會合にして男子を近け難き場合若くは著述家飜譯家等の爲めには特に女子の速記者をして之に當らしむ

麹町區富士見町五丁目九番地

佃速記事務所

電話番町四十八番

東京日本橋區本町二丁目
（電話本局千六百六番）

高橋齒科醫院

診察時間　午前九時ヨリ午後五時迄

明治二十六年四月四日第三種郵便物認可

私立大日本婦人衞生會徽章規程

第一條　大日本婦人衞生會々員は其會員たることを表するため左の徽章を用ゆ





●本會徽章料左の如し

㊀通常會員章

第三號　メッキ製拾二錢、送費六錢

第二號　正銀製四拾錢、送費六錢

㊁終身及特別會員章

第一號　七十錢（黑檢箱入送費九錢）　六十錢（桐箱入送費六錢）

第二條　會員章は本會幷に支會の集會に出席する塲合は勿論襟止兼用の便あるを以て成るべく平素佩用して廣く本會の普及を圖るを要す

第三條　本會徽章は右の實價を以て會員に頒つ

●入會注意

●御入會の際は三ヶ月以上の會費前納にて申込まるへし會員章は上段記載の實價にて御願ち申候へども送賃とも必らず御前納のこと●東京府下に限り毎月雜誌の配達を兼れ會費領收人を差出すべしと雖も郡部の方は地方會員の部として領收者差出不申候但東京府下の會員にても會費前納せられ合せて郵送料たも御納付相成候へば雜誌發行次第直ちに郵送可致候●追て支會々員は支會へ會費御納付のことゝす●會費は郵便小爲替にて本會事務所々在の郵便局（東京牛込築土八幡町郵便局）宛振出あるべし●會費受領證を要する節は送費として郵券一錢五厘封入せられたし●轉居せられたるときは其の旨必らず本會事務所宛通知せらるべし

●會員御紹介下され候御方には其人數丈の本會雜誌進呈

本誌一部定價貳拾錢

東京市牛込區上宮比町八番地
發行所　私立大日本婦人衞生會

東京牛込區矢來町三番地
編輯兼發行者　田中德三郎

東京牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
印刷者　飯田三千太郎

印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場

明治三十九年七月廿一日印刷
仝年七月廿五日發行　（毎月一回二十五日發行）
婦人衞生雜誌第二百號